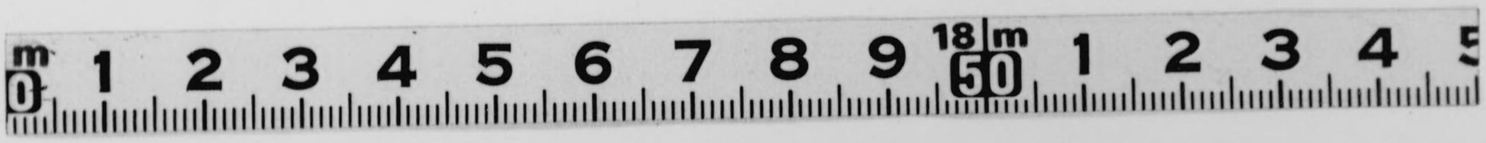
364
98



364-98

帝國圖書館藏

■美術叢書■

■第四編■

池大雅

相見香雨著

大正
7. 3. 25
購求

池大雅像

美術叢書刊行會賛助員

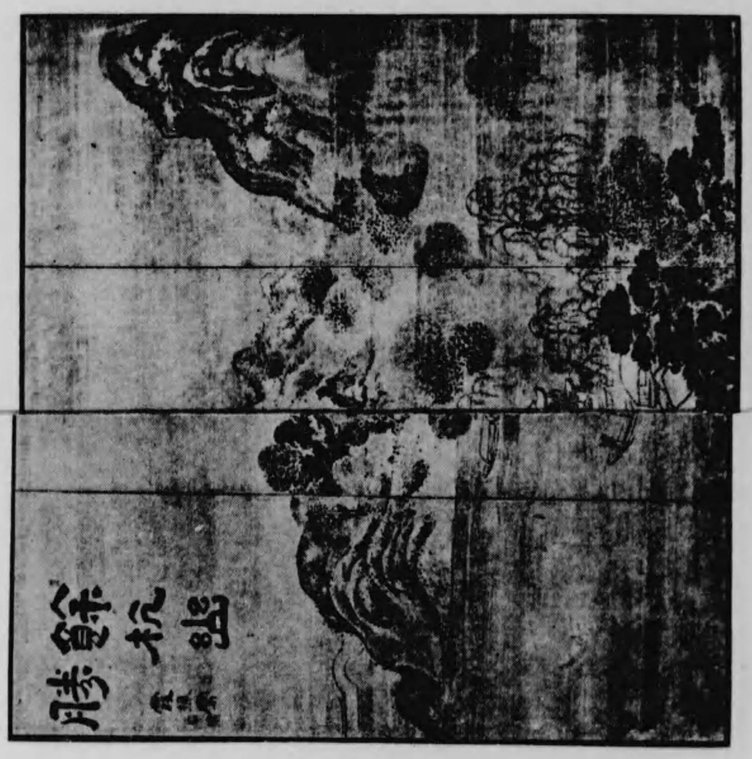
（いろは順）

伊藤忠太　岩村透
大村西崖　和田萬吉
川合玉堂　横山大觀
田島一　高村光雲
高駒吉　中村不折
中桑　上田萬年
黒川忠順　正木直彦
寺崎廣業　笹川臨風
木田清輝　三上參次
下村觀山　村武山

大雅と玉瀾　（三熊思孝筆）

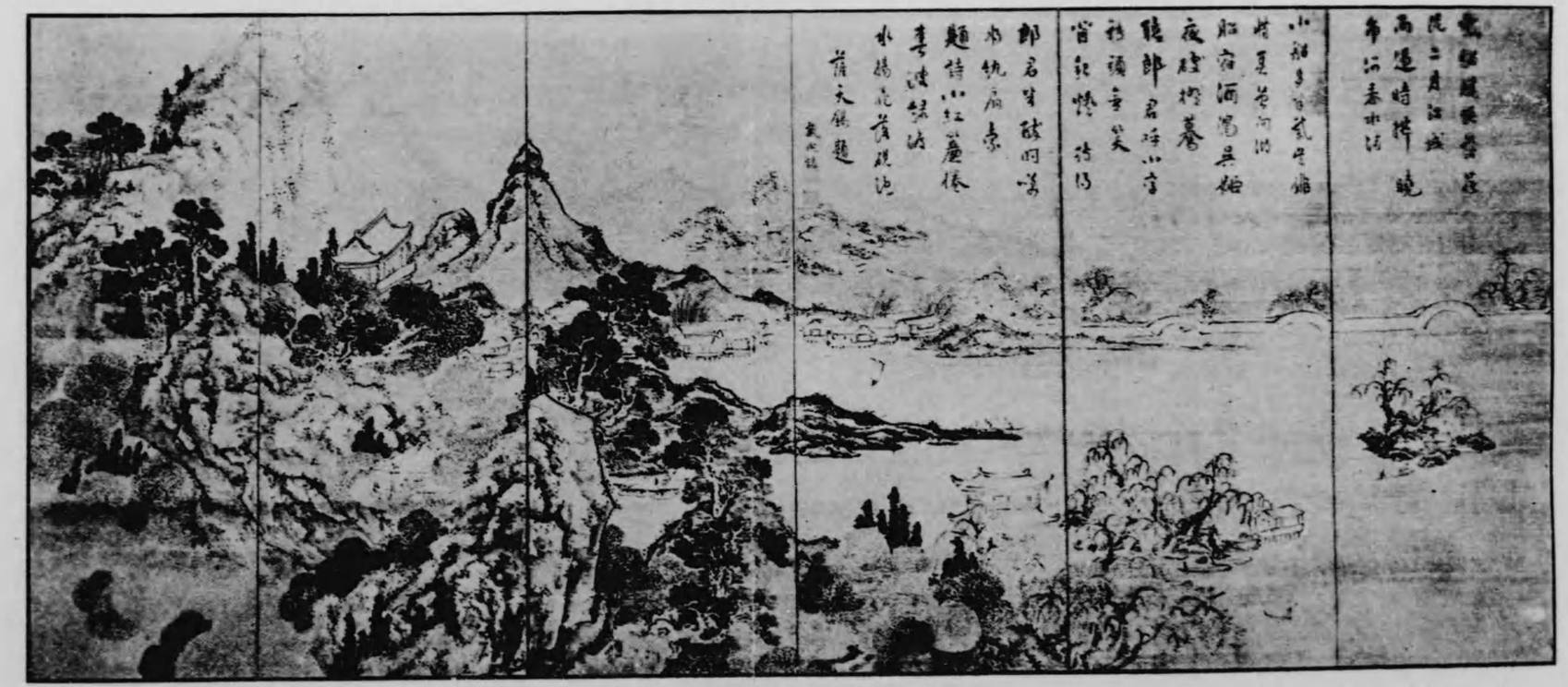
京都　富岡鐵齋氏藏

五老峯　　出雲　江角千代次郎氏藏

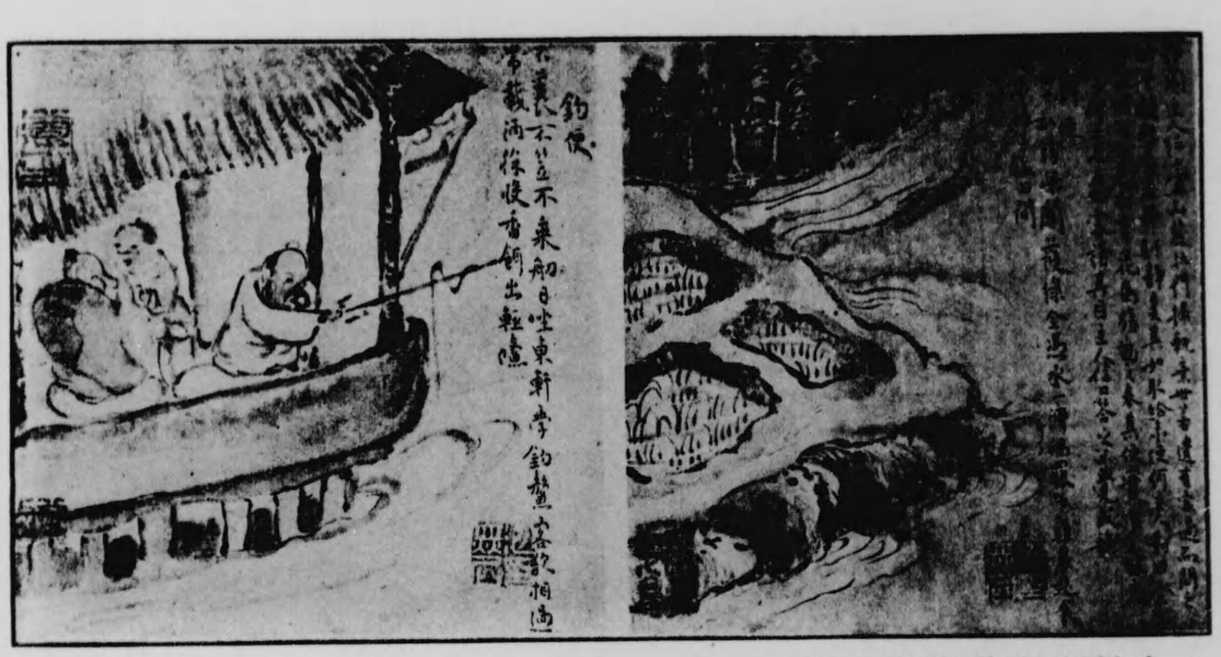


餘杭勝跡　幽

餘杭幽勝（其一）



餘杭幽勝（其二）　　攝津　嘉納治右衛門氏藏



十便十宜帖中の二頁　　大阪　大島甚三氏藏

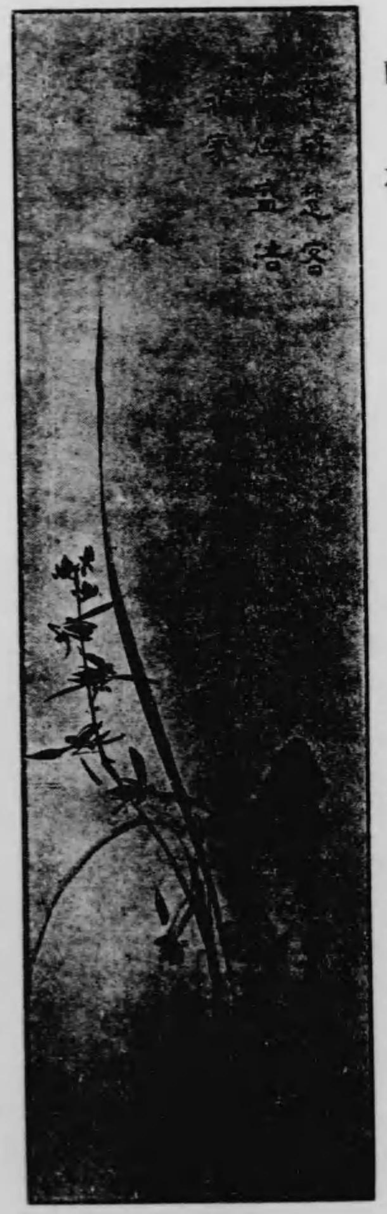
峽中棧道

紀伊　和中金助氏藏

那智瀧瀑

和泉　廣瀨龜太郎氏藏

蘭石



東京　長井越作氏藏

桃柳（玉瀾筆、百合題歌）

下野　菊地欣之助氏藏

池大雅目次

一、はしがき……一
二、大雅の生涯……四
　棄　兒……四
　神　童……五
　壯年の修業……七
　柳里恭……九
　馬　術……十二
　聖護院の邊に遷る……十三
　結　婚……十三
　葛原草堂の若夫婦……十五
　龍王を祭る……二十
　祇園南海……二十一
　指頭畫……二十三
　東　遊……二十五
　求大雅僧……二十八
　北陸漫遊……二十九
　參　禪……三十
　高芙蓉……三十
　韓天壽……三十一
　三岳道者……三十二
　三度目の登山……三十九
　名山記……四十
　中　年……四十一
　山陰漫遊……四十二
　壽　宴……四十四
　終　焉……四十七
　墓　碑……四十八

目次

目次

三、遺事……五十三
篤行……五十三
禮に厚し……五十四
瞽者の言に感ず……五十五
竹林中の一夜……五十七
祇園へ奉納……五十八
いづこの尊夫人ぞ……六十
袴着で旅行……六十一
月下の遊行……六十一
謎招牌……六十一
敗紙中の玉瀾……六十二
馬の往くに任す……六十三
○飴と小景一紙……六十四
青氈敗紙我家珍……六十四
小僧は後世可恐人……六十五
富士の窃寫……六十五
柳里恭と僞る……六十六
馬賃に寡す……六十六
大雅と蕭白……六十七
瓢然芳野に遊ぶ……六十八
○高野の歩障畫……六十八
黄檗の襖畫……七十
大雅寺……七十一
お半長右衛門道行の屏風……七十二
文事……七十四
畫像……七十五
四、玉瀾……七十八
五、大雅歿後の大雅堂……八十三
六、大雅概論……九十一

池大雅

相見香雨述

一 はしがき

常例に從へば、先づ冒頭に於て本邦南宗畫の由來、略沿革を述べ、而して池大雅はその如何なる位置にあるものであるか、大雅が生存の時代は、如何なる背景であつたか、といふことを記さねばならぬ筈だが、それ等のことは本叢書の前篇『南宗畫』に既に敍說せられてあるから、茲に亦同樣の事を述ぶるは重復の贅言たるに過ぎない、又多からぬ頁を成るべく經濟的に利用せんが爲めに、月並の序章を全廢して、直に大雅その人の一代記を敍せんと欲するものである。

由來日本の畫人は、その社會的地位が低くかつたが爲めに、其の事蹟の記錄が甚だ乏しい、それでも禁裏幕府乃至諸侯へ仕へたものは、自分の履歷書竝に自家の祖先代々の事歷を具陳する例となつて居たから、其の家々の先祖書とか由緒書とかいふやうなものがある爲に、表面上のとばかりではあるが、其の勤仕進退の事は月日まで明かに判るのであるが、在野の畫人卽ち所謂町繪師の類は、名人大家の人でも其の事蹟の大半は沒せられて、其の輪廓が甚だ明瞭ならぬは、その傳記が不鮮明なるのみならず、又美術史の一面の根底が薄弱になるわけであるのは頗る遺憾とせざるを得ない、大雅またその分に漏れず、彼の事蹟も頗る不鮮明である、大雅を崇拜すると神樣の如くにした木村蒹葭堂が、大雅歿後程經ぬうちに起草したと思はれる大雅堂年譜でさへも、疑はしきことのあるのみならず、重要なる事實の逸したこともある、大雅の歿した年蒹葭堂は四十二歳であるから、大雅の事蹟は能く心得て居た筈である、然るに其の錄する處の年譜は右の如きものである、因て惟ふに、是は蒹葭堂の調査が足りなかつたばかりでなく、恬淡なる大雅は彼自身にも自己の過去はよく記憶せなかつたのであらうと思はれる。それを百數十年も後の今日から詮索することは至難の事業である、然れども大雅に關する傳說の軼事奇聞は之を他の畫人に比較すれば頗る豐富である、而して其の一部分は所謂名人話の部類に屬して、彼が盛名につれて附會せられたこともあらうが、由來大雅の行狀は行雲流水の如くにして端睨すべからず、固より大正時代の常識を以て律すべからざるものであるから、彼の傳說の大半は或は存外に實直なることであつたかとも想はれる、且つ又大雅其の人の活躍して傳へられてあるのは此傳說の逸話にある、吾輩は當時流行の獨逸流のお醫者的研究を彼に加へたくない、彼の冷刀を以て解剖臺に於

て取扱ふが如き殘酷なることはやりたくない、そこで本篇は大雅其の人の如くに力めて正直に誠實に彼が生涯を敍述し、彼が藝術の內面的情調を行狀の上から考察せんと欲するものである。

二　大雅の生涯

棄兒

大雅は京都西陣の菱屋嘉右衞門といふ者の子であるが、その實は棄子で、さる由緒ある人の胤であるらしい、傳說に據れば、嘉右衞門子がないので、洛北御菩薩池の地藏堂に日參して、一子を授るやうにと願がけした、處がその七日目の朝に、不思議にも池の邊に棄兒があるので、嘉右衞門大に喜びて、之を拾上げて抱き歸て視ると白綸子襁褓に包んである、衣裳萬端尋常市井のものでないから、之は定めて並々ならぬ人の子であらうと思つたが、何人の胤とも分らないから、遂に自分の子とした、時に享保八年癸卯の七月のことであるが、生れたのは五月八日とある、之は棄兒の守袋か何かに書いてあつたのであらう、斯樣なわけで池の邊に棄てられてあつたのであるから、姓を池野といひ、拾つたのが初秋のことであるから、名を秋平とつけたといふことである、蓋し此說は附會かも知れないが、抑も天才大雅の一生は、斯くの如きロマンチックな詩的な物語からして其の發端が啓かれてある。

習字

父嘉右衞門の素姓は詳ならぬが、西陣で扇商を業として居たものらしい、家は豐かではない、大雅は貧苦の裡に養育せられたのであるが、幼稚の時から異常なる聰明で、三歲にして既に字を識つたと稱せられてある、五歲には立派に字をかいた、一日父に伴はれて、黃檗山に登り、元昶杲堂禪師の面前に於て大字をかいた、禪師一見大に之を奇として云ふには、此の兒は眞に麒麟兒と申すべしである、他日必ずや大名を天下に成さんとて、偈を作つて之に與へた、同席に見物して

居る坊主共いづれも皆驚かざるはなかつたとある、その翌年六歳の時に、三條寺町の清光院淵清に就て手習を始めて、十一歳まで此人に學んだ、傍ら古門前の茅庵といふ人に從つて素讀を受けた、八歳の年に薩摩人の山名潛龍、通稱主計といふに書法を學んだ、又十二歳の時に一年計り綾小路麩屋町通の内藤靜舟といふ人に素讀を授かり十三の年更に三條栴檀王院寺内に居つた清光院一井なるものに從て書を學んで、子井と號したらしい、當時の印文に池野子井とある、斯くの如く少時に數人の師に就て書法を學んだのは、父嘉右衞門は大雅の手性の非凡なるを見て、書家にしやうと思つたものらしい、而して就て學んだ師匠はいづれも皆佐々木志津磨から出た寺井養拙の系統の人である、清光院淵清と山名潛龍は養拙の門人、清光院一井は養拙門人三上次郎右衞門といふの弟子である。

壯年の修業

それから元文元年十五歳の時に友人の望月照溪の好に因て畫法を學んだ、と兼葭堂の大雅堂年譜にかいてある、望月照溪といふのはいかなる人か詳かならぬが、恐くは望月玉蟾のことではあるまいか、玉蟾は此年六十四歳であるから固より友人ではない、從て又『近世畸人傳』に「時に望玉蟾とともに相いへらく、從來畫家いまだ漢法を學ばず、俱に是をはじめむと、玉蟾は唐伯虎を學び、此の翁(大雅)は梅道人を學ぶ、各竟に一家を成せり」とありて同輩のやうにかいてあるのも誤りである、大雅或は望玉蟾に就いて畫法の手解でも受けたではあるまいかと想はれる、此年又桑原爲溪に從て書を學んだとある、爲溪は元來性理學者であるが、書法に秀でたるが爲めに、世に書家とみなされて居る人である、大雅此頃二條樋ノ口の邊に書店を開き、袖龜堂と稱して書畫扇を賣つて居た、畫は八種畫譜などを習つて、專ら扇面などをかい

て居た、傍ら篆刻もやり、又八十日許りも洛北一乘寺村なる石丈山が詩仙堂へ通つて八體の千字文を學んで、篆隷八分の諸體に通じて居る、そこで商賣の帳面を漢文で、中等扇三柄某先生携歸、估直既濟とか未濟とか記した、しかも之を篆書でかいて居たといふことである、或年旅行に出かけて、臘月に及んでも歸つて來ない、留存居の家内其帳簿を調べて見ると右の始末だから一も讀めない、よぎなく龜屋太助といふ人を賴んで讀んでもらつて、やつとのことに其の半分許りを調べた、大雅歸て來たら散々に戒められたから、爾來楷書したといふことである、以上記した處を以て見ても、大雅があんな名書畫をかいたのは、單に天稟の妙腕でばかり出來たものではない、幼少から數人の師匠に就て刻苦勉勵したことも尋常ならぬものである、是より先大雅名を亮と稱したらしいが此頃名は耕、字は子職、爲龍居士と號し、又鳧滸、葭庵、待賈堂等の別號があつた、待賈の字は論語から取つたとのことである。

柳里恭

年譜には大雅十六歳の年始めて柳澤淇園に逢つたとある、是果して十六歳の年か否かは詳かならぬが、此の兩人が相知るに至つたことに就ては、面白い傳說がある。

奈良の富商某が、石燈籠を春日神社へ獻納することがあつて、それに刻する獻燈の二字の揮毫を柳里恭へ賴んだ、里恭之を承諾していろ〳〵古法帖を檢べて、半年も掛かつて漸くに出來上つた、頗る上出來で、里恭心竊に得意ではあるが、天下何人か之を鑑識してくれるものがあらうかと、日々一人の小役人を其の燈籠の邊につけて、それとなく世人の評判を聞かせておいた、すると一日大雅が參詣して來た、流石の大雅この二字を篤とながめて、「能く書いてある」と一言賞めたが、やがて「併し惜いことには之は集め字である、二字が合つて居ない」と云つて立去つた、監

視の役人之を聞くや否や直に里恭の許へ此由を注進に及ぶと、里恭は大に喜んで「左樣の評判を致すものは只人ではあるまい、早速に其人を搜索致せ」といふことで、臣共が奈良中の宿屋を一々取調べた處、漸く大雅なることが分つたから、直に伴つて里恭の家に到り、初めて此の兩人が交を訂したといふことである。

右の佳談に依て見れば、十六歳の子供の話とは受取り難い、畸人傳には、

○淇園柳澤氏、諱里恭、字公美、一號玉桂、通名權太夫、大和郡山同姓の士也、文學武術を始めて人の師たるに足れる藝十六に及ぶとぞ、佛學さへ心得て俱舍論を聞きし僧もありけるとかや、中にも畫に長ず、朱舜水傳來の彩色の法を紀の祇南海に學びて、殊に人物の設色、世これを賞す、水に漬し、力を用ゐて揉み洗へども落ちずとなむ、爲人曠達不拘、客を好みて、才不才をいはず、寄食せしむるもの幾人といふ數を知らず、家祿多けれどもこれが爲に乏しきに至る、初め某の年、侯使として登極の御賀のため都に上りしついで、大雅にまみえて相觀し、これより往來絶えず、或時大雅大和に行きしに、路費盡きたれば、假初に立寄りて是を借るに、例の如くとゞめ、門を閉ぢて還さず、家臣又いふこと有り、幸にとゞまりて內（婦人をいふ）を好まるゝの病を諫め給はれ、多慾の爲に身を亡し給はむを憂ふといふ、こゝに大雅諫めて、其の由を說いて曰はく、もし諫に從ひ給はゞ止まらむ、聞き給はずば速に還らんと、あるじ首をふりて諫にも從はじ、還しもせじと、ますゝ門を堅くして守らしむ、大雅終に裏の垣を越えて歸りしとなり云々、

とある、登極の御賀とあるは、櫻町天皇ならは享保二十年冬の事、桃園

天皇ならば延享四年頃、即ち大雅二十四五歳頃の事である、いづれが正しいか分らないが、ともかく大雅夙くより柳里恭の知遇を得て、彩色の法などを敎はつたのは事實であるらしい、柳里恭は豫て唐畫の彩色法を祇園南海から授かつて居たといふことであるから、後年大雅が祇園南海を知るに至つたのも、柳里恭の紹介であつたのである、（又大雅土佐光芳に從て國畫の法を學んだと、疇人傳に記されてある。

馬術

大雅嘗て其の友儒家清田儋叟は語つて曰く、「われ若かりし時、馬術を習ふ、其師のいはく、そこもと武士にあらずして、騎馬の術學びても益なし、されど旅遊などせられ、足つかれなば、からしり馬にもまたがるべし、落つる術をならはざれば、怪我すべしと、われこれを是とし學ぶ、所謂からしり乘かけ二寶荒神三寶荒神なるまで、悉くその落ちかたを習ひえて、危難をのがれし事度々ありしと」とある

は此頃のことか。

聖護院の邊に遷る

寛保二年、大雅二十歳の年に、二條樋ノ口から聖護院の邊に居を移した、此時名を勤、字を公敏、號を九霞と改め、始めて大雅堂と稱した、又俗稱を菱屋嘉右衞門といつたとある、此時俗稱を斯く改めたといふことを以て見れば、大雅が父に離れたのは此頃の事ではあるまいか、年譜に十五歳の頃に「二條樋ノ口にて母子二人也」とあるから、其頃既に父を喪つてゐたと普通に傳えられるけれども、それには少しく疑ひがある、母なる人にも此の二十あまりの頃に別れたらしい、此頃又の號を竹居、玉海とも稱したといふ、玉海とは柳里恭の玉奎の號から一字を受けたのであると傳へられて居る。

結婚

かくて大雅は聖護院の邊に住すること三年許にして、延享二年の春三月といふに又もや轉じて祇園南林のほとり眞葛ヶ

原に新居を卜した、此頃大雅は既に兩親を喪つて、單獨の身でひたすらに書畫の技を練り時には祇園下へ出かけて、路傍に莚蓆を設けて書畫を賣てゐた、茲に大雅が眞葛ヶ原の陋居から程遠からぬ所に、世に祇園風流と呼ばれて、所謂一服一錢の質素にして閑雅なる一茶亭がある、そこのあるじは名を百合といひ、故あつて寡居し、二十ばかりなる町といふ一人の女兒と共に、母なる梶子から讓られた此のお茶屋を守て、貞操正しく只管娘の成長せんことを指折り數へて月日を過ごして居たのである、またよるべなき母子二人の世態なれば、此の愛女に何かよき聟がねもがなと明暮に祈らぬひまとてはない、かゝる折から百合の眼中にこれはと映じたのが大雅である、而して遂に大雅と町との一雙の風流才人が結婚したのは、延享三年卽ち大雅二十四歳の年であつたらしい（此の結婚期のことに就ては異說あれども茲には略する）此の結婚の當分のことであらう、甚だ可笑しい珍談がある、大雅は町を貰つて大に喜んで居たそうなが、幾日經ても一向に交りをせない、町は其の心を計りかねて媒酌の人にさう告げた處が媒人はそれではどうもならんとて、早速に大雅の處へいつて、さてあなたは夫婦になつても一向に夫婦の交りをなさらんそうだが、夫ではしるしがないといふものである、一體どう考へてゐるのですかと尋ねたら、大雅は低頭平身して、イヤ之はどうも恐れ入つた、實は自分は只仲ようして共に一生を送ればよいと思うてゐたが、然らば是からは謹んで致しまするとて、あやまつたといふ話である。

葛原草堂の若夫婦

それから三年目の寛延元年に、浪華の木村兼葭堂が京へ上つて始めて大雅に面會した、時に兼葭堂は未だ十三歳の子供であつたから、記憶も明瞭ではなかつたらうが、五十年計りも後になつてから當時の葛原草堂の模樣を追想してかいたものがある、大雅若夫婦が

新所帶のありさま髣髴として今尙眼のあたりに見る心地す、その文はかうである。

追憶すれば、最早五十年近くの昔に相成り、大雅堂先生も地下に歿せられたるが、おのれの始めて先生に見えたるは十三歳の春の事にて、權大夫丈人(柳里恭)とその葛原の草堂に於てしたり、何に就ても、おのれいまだ幼稚かりし時の事なれば、よく其時の狀景を知る事は出來ざりしかど、今に憶出せば明かに眼の前に浮び出でゝ見ゆるはその草堂のいかにも貧しかりし事と、大雅堂先生の汚き風をして居られたる事なり、草堂はかの眞葛が原の南の一端にありて、入口六疊、書齋四疊半の只纔か二室のみの小さき構にて、疊は足の引かゝる程ところ〳〵破れ、障子の窓は雨風に破れたるまゝつくろひもせねば、その穢醜しき事譬ふるに言葉もなし、おのれは里恭先生より、大雅堂の畫のすぐれたる事を聞き、且他よりも折々其人の品行の奇なることを聞きたれば、さして怪しとも思はざりしかど、もし知らぬ人など俄かに此處に伴はれたらんには、いかなる物穢き人かと驚かるゝなるべし、大雅堂先生はおのれ等の訪ひたるをいたく喜びて、おのれの故郷の事など何彼と尋ねられたるが、顏は何らかといへば大きく、額に小さき黑子ありて、眼より耳にかけて言ふに言はれぬ大樣なる處あり、聲は高き方にはあらねど、何處となく亮々しき調子ありて、興に乘りて物語る時には自づと高き聲を出せり、其頃の年は大凡二十五六歳ばかりにてやありつらむ、活氣話の上にあらはれ、よく語りよく罵りて、放談四隣を驚かせり、書齋には白紙唐紙の類を始めとして、磐沙引きたる美濃紙、絹地の一片など、膝を容るゝ所なきまで散り亂れ、一方には畫きかけたる山水の

畫幅あるかと思へば一方には花鳥の彩色を施さんとしたるものもあり、その外、書に關したる帖、篆刻に關したる書など、順序次第もなくあたりに散亂れ、おのれ等の座るべき所も無き程の有樣なりし、先生は近作なりとて、横物の山水圖一幅を示されたるが、里恭丈人は之を見て非常に感心せられ、近頃の出來とこそ覺ゆれと賞めたゝへ給ひき、その横物といへるは、幼稚き時なればよくは覺え居らねど、右の方に峯巒を作り左の方に遠水を見せ、楊柳を其間に點綴したるやうに覺えたり、其外賴まれたるものなりとて、花鳥の半彩色を施したるものをも示されたり、里恭先生はその彩色の上に、少しく意に落ちぬ處ありなどいろ〳〵と申されたり、されど大雅堂はそれに少しく服せぬやうなる有樣なりし、玉瀾女史とは二年程前に婚したるよしなるが、折しも戸外に出て不在なりしものの、やがて歸り來て、いと丁寧におのれ等に挨拶したり、年の頃二十二三歳にて顏は丸顏のさして美しといふ程にも有らねど、人並勝れたる面色何處となく氣高き處ありて、さすがは百合の娘と思はるるばかりなりし、後年玉瀾女史とその名天下に高く聞え、大雅堂と共に人に稱せらるるやうになりたるは、珍らしき事と謂ふべし、それにつけても權丈人の眼識の勝れたるは

（近世畸人傳所載）

驚くべき事にて、この陋巷に住ひたる若き畫工夫婦を今に天下の畫壇を左右するものなりと見られて、天下に名高き身を以て、下りて友の交を爲したるは格別の事なり云々。

此文洵によく草堂當年の狀況を描き盡して躍如たり、右に依れば當時大雅夫妻が絶えて世間の名利に迷はさるゝことなく、陋巷に晏如として琴瑟相和し、ひたすらに畫技の錬磨に怠らなかつたことが歴々として分る、又當時柳里恭の知遇を受ること厚く、里恭は實に大雅が師たり、奬勵者たり、保護者たる大恩人であつたのである。

龍王を祭る

大雅は所謂烟霞癖疾の人で、少時からして京洛の山水に親んで、四方の志はあつたが、兩親の存生中は遠遊はせなかつたといふことである、二十歳前後の頃には往々近畿地方に遊んだ、一とせ自畫の扇子を鬻がんとて、美濃尾張路を指して出かけたが、更に人の顧るものがなかつたのに落膽して、歸途江州瀬田に至り、獨り橋上に立て悄然として言へらく、吾道行はれず、止ぬるかなと、乃ち携ふる處の扇を悉く湖中に投じ、之を以て龍王を祭ると、心中に獨語しつゝ立歸つたといふ、之はまた名古屋枇杷島の橋から投げたのだといふ說もある、此の事何時頃の事か詳かならざれども、有名なる話にて、是より大雅の「流し扇面」といふ附會したものまでも出來た位である。

祇園南海

大雅兩親に別れた後、泉州岸和田に遊び、藥商某の家に一年許り居つたといふ、其の頃紀州和歌山に往き、同藩の儒臣祇園南海に始めて面謁して、南宗の畫法を授かつた、南海大雅に謂つて曰く、子畫を學ばゞ當に士大夫の畫を學ぶべしとて、乃ち蕭尺木畫譜を與へた、大雅大に喜びて、日夕手を釋かずして之を學んだ、此の畫譜後に兼葭堂に傳つてあつたと云ふ、又野呂介石が中林竹洞に話した處に依れ

ば、南海が與へたのは明人沈無名の畫譜で、大雅之を得て、其畫法に心醉して遂には己が名をも無名と改めたとの事である、又一說には芥子園畫傳であるとも云ふ、果していづれが眞實であるか一寸判斷が出來兼ぬるが、ともかく大雅祇園南海に謁し、南宗の六法を聞いてから、大に啓發する處があつて、畫格爲めに一等を進むと云ふ。

大雅が和歌山へ往つて、始めて南海に謁したのは、寛延三年卽ち二十八歲の冬の事であるらしい、此の年次の事に就て少しく辯じておかねばならぬことは、大雅堂年譜には

寛延二年　二十七歲　初て富士山に登る東都に遊び松島に到る
同　三年　二十八歲　越中立山に登る
寶曆元年　二十九歲　白山に登る
同　二年　三十歲　當年熊野に詣て南海に謁したとも云ふ
同　三年　三十一歲　始て南海先生に畫法を受く

とある、卽ち二十七歲から三年の間に、富士立山白山へ登つて、その翌三十歲の年に始めて南海に謁したといふことになつて居る、然るに南海が大雅が携帶して來て示した狩野元信の筆瀟湘夜泊の圖にかいた跋文がある、その末に庚午季冬玩瑜辛湘雲居とあるが、庚午は寛延三年だから、同年には大雅南海に逢つたに相違ない、又大雅が去るに當て、南海が送別の爲めに作つた「贈九霞散人幷引」と題する詩文がある、その中に「此去將ㇾ問二三山一」といふ句がある、此の三山といふのは大和の三山のことではあるまい、矢張り富士白山三山のことであらう、之に依て見ると、大雅は寛延三年二十八歲の冬に南海を訪うて、それから富士へ登つたらしいから、年譜は前後顚倒して居るやうに思はれる。

指頭畫

大雅指頭畫を巧みにす、嘗て人の爲に畫いた、偶ま伊藤介亭（名は長衡、仁齋の三子）傍にあつて、嘆賞稍久しうして、窮

郷僻邑の筆に乏しい處では復妙なるべしと曰つたのに、大雅大に之を慙ぢて、後遂に此技を廢したといふのは、有名なる話であるが、大雅が指頭畫を弄したのは、專ら壯年頃のことで、其技頗る妙なるものであつた、祇園南海を尋ねた時に、示したのも指頭畫であつた、南海一見大に其妙を賞して、「抑亦一世之絶技也」といつて居る、其文は前記の「贈九露散人幷引」の引文中に

（上略）既而覽二其所レ畫指墨者一、信歎二其奇畫一、蓋不レ用二筆刷一、指端染墨淋漓縱横隨レ意掃去、花卉翎毛人物竹樹一揮卽成、彷二彿眞趣一、大有二雅致一、抑亦一世之絶技也、昔者狂僧筆塚中山之族爲レ之泣矣、今也散人以レ指代レ毫、兎其必抃舞矣、云々

と、其詩には

筆頭未若指頭禪、妙悟靈通黄鶴仙、若使昔時司馬在、花庵屏障借雲烟

とある、卽ち指端縱横、花鳥人物何でも自由自在にかいたものと見えるが、此種の遺作今はあまり見受けない、後ち介亭にヒヤカされてから廢したといふではあるが、晩年にも描いたらしい、或人大雅が江戸の畫人渡邊玄對に贈つた指頭畫を見たのに、晩年の作であつたとかいたものがある。

東遊

右の如き次第なれば、大雅が始めて富士山に登つたのは、寶曆元年卽ち二十九歳頃のことであらう、次て江戸へ下つた、尤も馬場文耕が『當世武野俗談』に「戊辰（寛延元年）十月江戸へ來り諸侯大夫御歴々御聞及び賜ひて大名の御座敷へ罷出あなたこなたにて席畫仕候」云々あるを見れば是より四年前にも下つた事があるらしい、例の文耕のことだからあまり信用の措けないやうだが、此書は講談にはあらず、

當時世上の奇聞珍事をかき連られねたものであるから、戊辰十月とハッキリ書いたのも何か據處があつたらうから、之は信ずべきことゝ思はれる、その時のことなるべし、同書に新吉原松葉屋瀨川のことをかける條に、「繪も上手にて京下り秋平（大雅堂）が弟子となつて畫工にくはしく」云々とある、大雅の門下に松葉屋瀨川があつたといふのは配合頗る面白い、瀨川も大分茶けた女であつたらうが、遊女までも包容する襟度の洪濶なる處が、大雅の大雅たる所以であらう、又同書に「池の秋平畫名は九霞と申者なり（中略）此九霞畫に妙を得て今五本の指を以てゑがくよし」とある、前記祇園南海が文にも、贈九霞散人とあるを以て見ても、此頃專ら九霞の號を以て稱せられて居たと見える、又此頃指頭畫の名人として知られて居つたやうである。

また大雅江戸に在る日、某侯の邸内に知人があつて宿つた、時恰かも六月八日であつたので、今日は京の祇園の社の御輿洗の神事がある、こでも御祭仕らんとて紙を以て人形燈籠を造つて、拍手歡呼の大噪で邸内を練り廻つた、そこで邸の若殿未だ子供なのが、之を見たがつて、大雅を召されたらば、大雅は囃物に紛らはし、きかぬふりして、その人形を焚いて伴り驚いた風をして、これ〳〵神樣が人に見らるゝのを厭はせらるゝのであると申上げたれば、殿樣大に怒られて、早速大雅を追拂はれたといふ、此話も此度のことであらう。

江戸に於ける大雅の逸話の傳はるものは、右の樣な事がある、是等の事實から推して見れば、此時江戸には暫く數ヶ月位は滯留したものらしい、而して後ち寶暦元年かに松島迄漫遊した時は、八月下旬に江戸に着いて、九月十日に松島見物の途に上つたといふことであることを以て考ふれば、矢張り寛延元年に一度下つて、後ち松島行の時にも一寸立寄つ

たのであらう、さうして見ると富士へ始めて登つたのも寛延元年のことであつたかも知れない。

求大雅僧

大雅が松島見物の模樣、並に松島以東へも遊んだものか否かは詳かならぬが、此時の事なるべし、有名なる奇談がある、それは『近世畸人傳』にも「求大雅僧」と題して左の如く記されてあるから、眞實の事であらう。

大雅江戸より奥州に遊びし歸るさ、いつこにてか禪刹に入りて午飯を乞ふに、住僧は他に行きてあらざりしかども、こゝろよくもてなして飯茶を進めたり、されば大雅卒に一偶をとゞめて去りぬ、住僧歸りてその偶を看て甚賞し、これが和を作り、跡を追ひて京の方に趣きしに、道路の間逢はず、つひに京まで來りてこゝかしこ尋ぬれども、彼の偶に池無名と書けるまゝにとひたれば、其の名を知る人なし、もとめ佗びて空しく歸らんとせしに、せめて東山の寺社拜み給へと人の勸むるにつれて、まづ祇園の社に詣でたるに、繪馬殿に掲げし蘭亭圖に池無名と記したるを見つけて、やがて坊に入りてとひ、始めて其の所を知り、到りて對面に及びしが、今は本意とげたり、京に用なしとて其の日旅立けりとかや、一偶の爲に數百里を追ひて、事遂げてまた他意なき洒落、いとも奇なり、大雅歿後に此の話を門人に聞きしかば、其の奥州の地名僧名ともに洩しぬ、惜しむべし。

北陸漫遊

年譜によると、大雅松島に遊んだ翌年に、越中の立山に登りその翌年に又加賀の白山へ遊んだとある、詳しい事はわからないが、兎に角旅行好の彼は益々漫遊の興樂に耽りて、年々出かけて往つたらしい、その行先は專ら山の方で、海の方へはあまり向はない、故に畫いたものにも水よりも山の方が多い、彼は確かに山岳趣味の人物で

我邦の山岳研究者として可なり先輩である。

參禪

寶暦元年、白隱禪師西國巡錫の途次京都に立寄られた、その時大雅往きて其座下に參禪し、一偈を呈したと云ふ。其偈は

耳豈得レ聞隻手響、耳能沒了尙存レ心、心能沒了尙難レ得、却識二師恩一不レ識レ深

又一説には大雅夫妻相携えて、駿州浮島原なる禪師の下へ往つて參禪し、修道三年に及ぶといふことも聞いた、何れか正しい今猝かに判じ難い。

高芙蓉

此頃大雅が無二の親友に、高芙蓉と韓天壽の二人がある、高芙蓉、名は孟彪、字は孺皮、甲州の人、醫家の子であるが、幼より醫たるを好まず、弱冠京師に遊學して、遂に儒を以つて業とした、性多技尤も篆刻を以つて著はる、精技絶妙柴栗山賞して印聖と稱した、天明四年六十三歳で歿した人であるから、大雅より一つの年長者で、壯年の頃から友人である、此頃芙蓉今も煎茶に用ゆるキビシャウといふものを見付けて、之を大雅に告げたれば、大雅大に之を賞玩して其形容を描き、下に左記の如く記して印刷して知人に頒つた。

急燒　又名宜興罐（キイヘンカン）

右見清人吳成充船中饗二和客金右衞門一八僊卓式記

丙子冬十月大雅堂印施　高芙蓉檢出

丙子は寶暦六年である、キビシャウなるものは此頃から流行つたものらしい。

韓天壽

今一人の韓天壽は、天壽はその名、字は大年、醉晋齋と號し、俗稱を中川長四郎と云ふ、韓天壽の稱を以つて行はる、伊勢松坂の人、初め葛烏石の門に入りて、文衡山の書風を學んだが、後に東江源鱗が勸に依つて二王を學んで一家を成した書家である、寛政七年に

六十九で死んだから、大雅よりは四歳の年少である、韓天壽が大雅と知るに至つた次第に就ては、奇しき傳說がある、天壽王右軍を學んで、日東第一の書と自負して居るが、惜しいかな鄙僻の地に居るので人の之を顧るものがない、天壽爲めに心平かならず、遂に氣も狂するばかりになつた、此頃天壽の養子となつて居た餘夙夜が、素行修らざるが爲めに、離緣となつて、京に上つて大雅の門人となつた、そこで或時大雅に天壽が事を物語つたらば、大雅は大に天壽が心事を哀んで、自ら羲之體の一書をかいて、夙夜に持たせて天壽に示さしめた、天壽一見その妙に驚きその知己に感じて狂氣も爲めに恢復し、遂に莫逆の交を訂するに至つたといふのである。

三岳道者

大雅、芙蓉、天壽の三人は齊しく多技多藝なる人物で、書畫篆刻は相互に學んだと傳へられ、同氣同癖の仲間である、そこで三人相携えて寶曆十年六月には名山漫遊に出かけた、大雅の富士登りは二度目である。此度は先づ北陸方面に向ひ、江州から加賀に入つて、白山に登り、七月の初旬に越中の立山に至つた、それから越後路へ出て直江津から信州へ入つて、戸隱の幽邃を探り、善光寺を經て淺間山から妙義山に於て、具さに其の奇勝を賞觀して、畫囊爲めに重きを加へた、次いで碓氷を越え、上武二州の平原を過ぎ、秩父の武甲山に日本武尊の古跡を尋ねて、八月の中旬といふに、一行は恙なく江戸へ着いた、築地八町堀の篠屋といふ旅亭に宿つたが、此頃大雅の畫名は既に嘖々として全國に傳つて居るから、大雅の來れることいつの間にか傳はつて、揮毫を需むるもの陸續として至つた、そのうるさきに堪え難かつたのか、僅かに四日ばかり留つて、直に富士へ向けて出發した、富士へ登つたのは同月の二十二日であつた、韓天壽の日記の一條に

二十二日といふに富士山へとのぼりき、こたびは西の口より登りぬ、先の年登りし時は、しか〳〵なりし、今日よりは雲の多き日なりしなど、何彼と大雅堂語る、二合目にておもしろき景色になりたりとて、立留りて寫生す、おのれも少しばかり雲の行きかよひたるさまを寫し取りぬ、案内するものゝいふ、今日のごとき日和よき日はまれに侍り、御客様方は御幸福なりなど語り合ふ、四合目あたりより山は次第に險しくなりて、六合目あたりに登りける時は、流石の大雅堂も勞れぬとて憩ふ、雲いと少き日にて、伊豆、駿河の海など、手に取るやうに打眺められて、美景言葉にも盡されず、大雅は猶二三枚の圖をばつくりぬ、且ついろ〳〵と倪雲林の畫法の妙なるよしなど語り出せり、やがてまた登り行くに、七合目あたりに至れば、樹木全く絶えて、綠の色は空ばかりになりぬ、然るにいとも驚かれ

（近世名家書畫談所載）

しは、八合目近く登り行きたる頃、暴風俄かに吹き起りて、今まで眼の前に見えたる景色は、幻のやうに消え果てゝ、雲はちぎれたる綿のやうに、われ等の脚を蔽ひ包む、人々皆おのゝきて、こはいかにせし、いかにせばやと驚きまどふ、案内のものも、こは御山のあれ出させ給ひしなり、御伴の中に不信心なるものやある、と言ひ罵りつゝ、一歩も早く八合目の石室にのがれ入らんとぞひしめきける、われ等はそれをも物とも思は

ず、雲霧の往來のさまのおもしろしとて、をり〳〵佇立みて模寫をなんなしける、されどさるのどかなる事爲さん場合にも侍らねば、いそぎて八合目の石堂へとのがれ入り、一先ほつと息をつき侍りぬされどそれより二日が間は山は荒れにあれて、雷暴風などのなりひびくさま、この世も終りになりしかと思はるゝばかりにて、心細さ限りなし、三日目には、をり〳〵少しく晴れ模樣になりたれば、この隙にとて案内のものを促し立てゝ、そこ〳〵に山を下り侍りぬ。

年譜に「富士八級に至る」とあるは、この暴風雨に逢ひたるが爲めであらう、富士を下りて、その夜は岩淵に宿り、翌日三保の清見寺から田子の浦に遊びて、九月の中旬に一行は無事京都へ還つた、此行韓天壽が腰につけて居たといふ小遣帳の一部分が、『名家書畫談』に載せられてある、その内に

表に三岳記行と題し背に韓の一字を題す内には起程の日よりして日々雜費竝に途中の光景を記し又見る所の山川の眞景草々走筆其間にあり今よりしてこれを見れば一見の間三老遊境想像するにたへたり因つて大略を左に載す。

七月二日、一二百文六日市藤左衞門賴泊尤辨當持此方より禮を遣、一百二十六文内の男長左衞門三人荷物案内牛首迄賴二匁五分の所白衣道者故如此よし、同三日一百文牛首七郎左衞門中食一匁世話料三十八文朱一升二合代、一百文韓わづらいかご代、一二十四文池おどり見物入用、一拾貳文高わめ代などしるせし類なり、或人云、この小帳を見れば其往來本ちん泊にていわゆる六部僧の境界にて又火食せざるものゝ如し、後の文人墨客其高名を鳴し口に膏粱を嗜み足を肩輿に托して其技を賣り遊歷する輩よりこれを見ればいかにも殺風

景なることならずや、されどもこの三老人好む所たゞ千山萬壑烟霞泉石の間にありて其外は願はざるべしと云はれたり。

とある、右の内「一二十四文池おどり見物入用」とは、大雅が一人でどこか山村の踊でも見に往つたものと見える、而して茲に掲げた三老道中の圖竝に老翁彈琵琶圖は寫し出して、「老翁彈琵琶圖は大雅信州岩村田旅店にて白き唐紙戸のありしに興に乘じ揮寫せしものなりこれは自身眞容の意なるらし和歌も自詠なるべし」と記し、又此の手帳の外に大雅、芙蓉の三人此行を共にしてから各三岳も各一冊づゝあつたやうにかいてある、

（近世名家書畫讀所載）

道者と號した。

此の行の思立に就て一奇談が傳つてある、始め芙蓉天壽の兩人が大雅を訪ねて、談偶々三山のことに及んだら、三人等しく遊意勃々として禁ずる能はず、思ひ立つた日が吉日だといふので、卽座直に旅裝を整へて出發した、大雅は疊の下から潤筆に貰つた、封金を取出して懷にして往つた、時に天壽は手紙一通を認めて、伊勢の鄕里へ送るやうにと玉瀾に托しておいて出かけたが、玉瀾はついその發送を忘れたので鄕里では天壽が行衞不明になつたとて、一時大騷をして探索したといふ話もある。

三度目の登山

年譜には、右の翌年卽ち寶曆十一年三十九歳の年の六月十八日に富士山に登つて七月六日に京へ歸つたとある、此の度は大雅單獨であつたらしい、又是歳秋葉、蓬萊寺、伊吹山にも登つたとある。

名山記

九州の大儒龜井南冥が壯歳京師に遊學してゐた頃、一日大雅を眞葛ヶ原の草堂に訪ねた、時に大雅適ま名山記を誦して居たが、南冥を見るや「盤古洪荒の時一巨靈あり、手に沙石を掬して彼此排置し、大は喬嶽となり、小は培塿と爲りて、我輩行樂の處と爲せる、いと大なる賚なり」と語つて、呵々大笑、終始山岳談ばかりで、更に畫事に及ばなかつた、それから五六日を經て、再び草堂を叩いたらば、大雅は富士登山に出かけて居なかつた、此事は南冥の日記かにあることださうなから、事實であらうが南冥が笈を負うて京攝に遊學したのは、彼の二十歳の寶曆十二年である、されればその大雅を訪ねたのも、同年か翌十三年頃のことであらう、して見ると此時富士へ登つたといふのは、第四回目であつたか、或は右の年譜に寶曆十年十一年に二度登つたとあるのが、年が違つて居るのであるか、明瞭を缺いでは居るが、要するに三四回は登山したに相違ない。

或時西國の一士人が江戸へ祇役する途中京都へ立寄つて大雅を訪ねた、さて別るゝに當りて大雅は其處まで見送り往かんとて、道に富士山の事を語合つて行く内に、急に登山したい氣になつて、歸てその事を玉瀾に諮るでもなく、そのまゝ同行して遂に駿州まで至つて又も登山したといふ話のあるのは、聊か受取難いことではあるが、事實とすれば右の第三回目のことでもあらうか。

中年

寶曆十二年四十歳から明和八年四十九歳の年までの十年間の行狀が詳かならぬ、年譜にも「此間無奇話」とかいてある、惟ふに此の十年間卽ち四十代は所謂男の分別盛の時代で、殊に大雅が五十四年の長からぬ生涯に於ては尤も重要なる活動期である、九州に至り山陰に遊んだのも此間の事と思はれる、彼の書畫が全く脫俗して、高遠

平淡の妙境に至つたのも此の時代であらう、從て彼が會心の名作は概ね此頃のものにあるのであらうが、此頃の事蹟が分らない、明和五年十一月板の『三都學者評林』書家の部に

卷軸上上吉　大雅堂

「ヲルロ」畫家じやないか「頭取」いへ〳〵書家で御座り升、どうしたことやら、畫名が高うござつて、人がよく受取ます、御仕合〳〵。

又同じく明和五年板の『平安人物志』にも書家の部に

池無名　字貸成號大雅堂　智恩院袋町　池野秋平

と記し、次の畫家の部には「池無名再出」と出してある、當時書畫併び行はれたのである。

山陰漫遊

大雅が山陰道へ遊んだ年次は詳かならぬが、當時の遺作を見ると、其用筆既に圓熟して、揮灑縱横、逸韵曠朗の高致を湛へ、款識に多く霞樵と書いて居る、どうしても晩年に近い明和年中の事と思はれる、山陰と申しても專ら雲州に留つたのである、勿論雲州の觀光を目的として來たのであらう、遊跡の傳說は伯州米子邊からあつて、因幡方面にない處を以て見れば、岡山から作州路を經、四十曲の嶮を越えて米子へ下つて來たらしい、米子では同地の豪家鹿島氏でかいたと傳ふ作品が少々ある、それから出雲に入り松江では暫時足を停めて碧雲湖畔の風光を賞し、近郊天倫寺に朝鮮の名鐘あるを聞いて、之を見んが爲めに登山して、赤壁の圖大横物の紀念作を遺して居る、又島根半島の枕木山へ登つて、北は日本海の壯觀を望み、南は雲伯の大天橋を俯瞰して飫くなき彼が烟霞癖をたんのうせしめたのであらう、次で西漸して今の簸川郡に至り、庄原の一山寺に居り、轉じて出東の豪家勝部氏に客たること數月、此間鰐淵寺の奇勝を探り、出雲大社へも參拜したであらうが

詳かならぬ、又足跡石州に及んだかどうかも分らない、ともかく篠川郡に留まること尤も長く、從つて其遺作も此地方に一番多いのである。

壽宴

安永元年大雅五十歳の春を迎ふ、その四月門生等相謀りて賀壽の宴を祇園町の相馬屋に催ほした、來り會するものは皆當代の文人墨客五十餘名に及び、柳太夫は郡山から兼葭堂は大阪からいづれも態々上り來つて席に列した、門人杉雨亭、嘯風亭雄選の二人が幹事役をつとめてよろづ斡旋した、雨亭が其の會況を記した一文がある、其要領を摘錄すれば左の如し。

今日は師の君の壽宴を鴨川に開くとていとといそがはし、おのれは嘯風亭と二人して、何彼の準備をとゝのへ置かんとて朝より出で行く、いとのとかなる日にて、嵐山の櫻今をさかりなりなど人々皆いふ、四條の橋をわたり行く人の影織るが如し、午後の二時といふに、人々皆集ひ來ぬ、いづれも皆當代の名士とぞきこえたる、柳太夫も郡山よりわざ〳〵來りて、この席へはつらなり給ふ、玉瀾夫人も師の君と共に今日來りたる人々にいやのべたまひぬ、身には常に似ず、今日のみぞ粗末なる絹の衣を着けたりける、集とひたる人、大凡五十餘名とぞ聞えし、席上師の君は席畫幾十枚となうつくりたまひしが、この中にて蘭と石をかきたる畫ぞ尤もすぐれたるべき、落款には寶暦十一年四月五十壽宴於鴨河之畔霞樵となんしるされたりける、やがて酒出でゝ、人々皆めでたしとて歌ひ騷ぎぬ、師の君はいと心地よげに兼葭堂のあるじ又は柳太夫などゝさま〴〵に昔の事語り出でゝ、その盡る處を知らぬばかりにぞ見奉れる、俳諧師のよみいでたる發句といふもの、いくつとなくありたれど、今は忘れたれば記さずなん、それにつけても、師の君が五十年間、一意畫の道の爲に

（藝苑雜錄所載）

力を盡されたる苦心の程は思ひやらるゝにも餘ありと申し侍るべきか、おのれ等門弟の末に至るまでも皆師の君の今日ありたるを限りなく祝し奉るになむ、會散して師の君の歸途につきたまひしは、早日くれて東山の處々に火影いとあざやかに見ゆる頃にてはべりき、おのれは嘯風亭とあとにのこりて何彼と取片附などしつ

宴席の光景悉く盡されてある、文中に柳太夫とあるは誰人にや、柳里恭は是より十餘年も先の寶暦八年に歿して居るから、その嗣子どもいへるにや、其他此の時の席上作として、大雅が掌に墨をつけて押した手形に「とし春はれかた一方の手を明けの春」の句を題した圖が世に傳つてある。

終焉

安永元年右の壽宴を張つた頃は既に盛名一世を壓するばかりの大家なれば、揮毫の要求も山なすばかりなるに忙殺せられて、閑日月に乏しかつたのであらう、さればもはや漫遊にもあまり出られず、祇園祠畔葛ヶ原の草堂に立籠り、孜々として筆を執り、倦めば則ち琴を彈じ、玉瀾瑟を合せて、悠々自適して居つたのであるが、安永五年となつて、初春の頃より少しく病に罹り、次第に重り行くばかりなるに、門人等太く之を患ひて、頻りに醫療を勸めたが、大雅は豫め其の死期の近づいたのを知りて、一服の藥餌をも用ゐず、遂に四月十三日といふに草堂に歿した、享年五十有四、由來性癖烟霞に親しみて、體軀頑丈、

且つ頗るのんきなる人なるにも拘はらず、齡未だ還暦にも達せずして遠逝したのは、抑もいかなる病魔に冒されたのであるか、命なる哉、門人等喪を理めて洛西寺内千本通淨土宗淨光寺に葬つた、其の訃音を傳ふるに當て、門人等一文を印刷して、以つて四方の人々に贈つた、其文に曰く。

平安大雅池先生以享保八年癸卯五月四日生于都下某街今玆安永丙申四月十三日羅病卒于葛原草堂享年五十四葬于船岡南淨光寺先塋之側焉寅告遠近　諸君

丙申四月　　平安門人　等頓首

墓碑

大雅歿して後、門人等その遺墨を賣出した、遠近之を聞傳へて、希望者頗る多く、遂に七百兩の金を上げたといふ、そこで門人等相議して、此金を以て何か先師を紀念すべきものを作らんといふので、一大碑を建立するに決定した、その碑文を柴栗山に頼んだ、處が栗山の謂ふには碑文を書くのは難い事ではないけれども、大雅の面目は文章で書けるものではない、我に一策ありその七百金を以て一座の大石を求め、佛像にもあらぬ　巨像を作つて、其胸間に「たいがどう」と深く彫り、其外文句は一切記さず、之を大津粟田口の道より望める樣な山の上に安置したらば、往來の旅人の見印にもなり、後世に至りては益大雅堂の名が傳はらん、さうすれば大雅もあの世に於て、一笑して此擧に贊成するであらうと云つたが、門人等此の妙案を喜ばず、頻りに碑文を請うて止まず、栗山又曰く、然らば瑣々たる石碑を作るにはそんな大金も要るまいから、其殘金を京洛中の貧民に頒ち與へば、是又故師の意にも愜ひ碑文に載せても美事であると勸說したが、これにも又門人等肯ぜず、そこで栗山は遂に筆を取らなかつたから、餘儀なく蕉中大典禪師に請

うて、碑文が出來たといふのである、墓は淨光寺の門を入て、本堂の西側の墓地を眞直に突當ると、西北隅に木造の小屋に覆はれてある、碑身の高さ二尺三寸、表面には高芙蓉が篆書にて題して「故東山畫隱大雅池君墓」と二行に彫まれてある、側面より裏面には卽ち大典禪師の碑銘がある、其文左の如し。

池貸成歿矣、既表レ墓焉、而未レ有レ銘也、以爲レ請、余嘗知二貸成一爲レ人蕭散、不下以二寵辱一驚レ心、善與レ物和、而不二苟合一釁レ志、外疎放而內實修檢、與レ人交、謙損而不レ阿、簡二於禮法一、當レ往不レ往、當レ答不レ答、而顧二諸義一、未二嘗有レ所レ失、裨二人之志一、拯二人之困一、惠而弗レ望、廉而弗レ劌、其於二取予得失一恬淡如也、平生行事、多出二於人之所一レ不レ意、於レ是有二畸人之目一焉、貸成生二于平安一、幼而穎異、學レ文學レ書、無レ不レ能、而獨長二於繪事一、圖二山水一尤妙、好游二名嶽一、足趫健、高峻幽奧、無レ不二戾極一、卽取以爲二毫端趣一、數登二富士一、而每異二其路一、因作二富士圖十數幅一、各變二其形狀一、皆其所二經覽一、在昔畫工所レ未レ及也、安永丙申四月十三日、病卒二于祇園葛原草堂一、距二生享保癸卯五月四日一、得レ年五十有四、葬二于船岡之南淨光寺先塋之側一、貸成名無名、始名勤、世皆以二大雅堂一稱レ之、妻玉瀾、姓德山、閑靖不レ飾、能配二夫之行一、亦能レ畫有レ名、無レ子家絕、悲夫、世皆知二大雅之畫一、而不レ知二其行一、知二其行一、而不レ知二其心一、故爲敍二其梗概一、如二其畫一、世則存焉、不レ待レ論也、銘曰

若人胡不レ壽　若人胡無レ嗣
庶安レ子哉　淨光之地

又同寺の位牌には「大雅翁秀賢義哲居士」と題し、裏には左の如く記してある。

安永五丙申年四月十三日卒　施主　門人　嘯風亭雄選

文化紀元甲子年四月改　奉納永代日牌祠堂

＊　＊　＊　＊　＊　＊

池亮　字爲龍　袖龜堂　鳧滸　葭庵　待賈堂芥煥ノ名ツクト云

大雅　池耕　字子職　號爲龍居士

異名　池勤　字公敏　號九霞　竹居　大雅堂　玉海

池無名　字戴成又貸成廿七歳ノ時東武松島ニ遊ヒ翌年加州ニ趣キ池無名ト改ムルト云或ハ加州ニテ改名ストモ云

（大雅堂年譜）

三　遺事

篤行

大雅母を喪ひ、その葬るに當りて、自ら親しく棺を負うて行く、門人之を止むれどもきかずして曰く、老母の病むや人を見るを欲せず、食膳予の供する所にあらざれば取らず、夫れ死を送るは大事なり、豈之を人に委す可けんやと。（近世叢語）

ある豪富者、畫を託せしに、月日を經て果さず、使至る毎に近日とのみいふ、一日童僕例の如く來るに、尙畫かざれば、門を出づるより獨り罵りて、這の死畫師人を勞する事幾度ぞ、自負歟、惰歟、人をあなどるかといへるを聞きて、急に走りて引とゞめ、君がいふ所甚理なり、吾過てりとて、直に筆を染めて與へたり。（近世畸人傳）

又一書林の僕、主人の金を用ゐて遊興し、放逐にあひ他國へ行かむとする時、道人（大雅）の許へ來りて別を告ぐ、道人甚憐み我主人に詫びむと云

ひて、持る所の書畫調度を賣りて、其金をつくのひ歸參せしめたり。（同）

兩生あり、貸成に從て遊ぶ、甲嘗て五金を乙に借る、期を過ぐ、乙之を徵索す、甲曰く、業に已に之を賠ふと、爭ひ執りて止まず、遂に之を貨成に質す、貨成叱して之を逐ひ、自ら藏する所の書數部を鬻ぎて十金を得、兩生の家に往き、各五金を與ふ、兩生慚怍辭に苦しむ、貨成怫然衣を拂うて去る（香雨曰く、此話と前出西國の士の東行するを見送て遂に富士山下に到つたといふことゝは、村瀨栲亭が「池貸成山水畫譜題辭」の內に記す處にして、栲亭此二事に就て月峰に質したるに、月峰も素より聞く所也といつたとある）

禮に厚し

大雅といふは鈍に禮を正うして、一向磊落でないので、そして其行ふことが一とし奇ならざるはなしです、園內や其近邊で茶摘をする時にいつも裃着て禮服でやる、それで他の人が何故に裃つけて茶摘をなさるかと尋ねると、大雅はいや茶は茶湯といふて神佛にも供へる物であるから、夫で謹で禮服で茶摘をするといふたそうです、それで大雅が冷泉爲村卿の門に入つたが、卿が病氣の時には、毎日其門に至つて病狀を伺つたとのことである、それからは公卿の中でも五六人知交が出來た所が、其の後は大雅が市街へ出る毎に必ず藁草履を穿てゐる、何故に此頃は草履ばかりお穿きになるかと他の人が聞くと大雅は、や此頃は御堂上方に御懇意が出來たで、若し途中でお目にかゝつた時も普通の履物では失禮にあたる、さればとて跣足になることも出來ぬから、夫で草履穿で出ると答へた、また冷泉家の記錄にも大雅といふは至つて禮の正しい人やと書いてあるそうです。（江湖快心錄）

賢者の言に感ず

大雅若かりし折、三絃を好める餘り、その頃の妙手、安永檢校の近隣に居を卜し、日日人に敎ふるを聞きて心を遣りけり。

或る時安永の家に至りて殊更に近隣に卜居したるよしを告げて一曲を望めり、安永其志の切なるに感じ、その傍にありし三絃をとりて一曲を彈じ聞かせたるに、その三絃裏皮やぶれたりければ、大雅少しく意に滿たずして、皮の全きものを以て彈弦せんことを乞ひけるに、安永これを不快とし、汝は何を以て業となすと詰問せり、大雅答へて、繪をかくものなりといへば、その繪は拙かるべしとて嘲り笑へり、大雅おもへらく、一道に達しぬれば、よろづのいたりも深きならひなれども、さりとて瞽者のいかで繪事を解すべきやと、かたはらいたくおもひ、いかなれば、おのれの繪の拙きを知り給ふぞと問ひ返しゝに、安永笑ひて、今裏皮の破れたる三絃にてひきたるを、あかずおぼす其きゝさまにて、繪の拙きは著るしきなり、すべて三絃は右に撥を持てれば、右手にて引くことふも更なれど、左手に精神なくては、妙處には至るべからず、いま我が左手の精神、汝の耳に入らぬをもて推すに、繪事もまた筆は右手もちてかくは、いふもさらなれど、おそらくは、左手精神あらじとおもふゆゑなりといひければ、大雅はいたく感服懺悔して、ふかく恩を謝してかへりて後、繪にふかく心やりたりけん、つひに世に鳴るばかり、一家をおこされたりき、これひとへに、安永檢校が恩にて、やがてわが繪の師なりと、常に自らいはれたりき。（北邊隨筆）

竹林中の一夜

大雅かつて和歌に遊びて行脚せし頃、やどをとりうしなひ、すでに夜に入る、一寺へゆきて書牘を投じて、宿をこひしに寺僧ゆるさゞれば、とある所の竹林のなかに入りて、趺坐して曉をまつに、夜もすがら何やらんかたはらにて、がさ〳〵とせしが、夜あけて見れば蓑にも笠にも小蛇いくすぢも集り居りたりといへり。（假名世說）

香雨曰く、此話はもと清田君錦が『孔雀樓筆記』に記されたるものに

して、大雅の直話に聞いたことだといふ。

祇園へ奉納

大雅堂（中略）一日書林の許にて、年頃望みし一書を見る、欣然として其價を問に、價最貴し、大雅云我に蓄へなし、故に望を空うす、冀は是が爲に今より務めて金を積まん積んでの後、此價に足りなば我に給へん、さりながら賣物の事なれば其間に他に望む人も有べし、若左有んには、我に知せよと云、書林云、此書は高價なる故、容易に望む人も有まじ、若有らば其由告申べしと約して、夫より大雅は、日頃に替り俄に客嗇になりて物毎を約やかにし、年を經て望みの通金を溜め、已に價調ひぬれば、彼書林へ雀躍して走り行き、年頃の望み足りぬ、其書を我に給へと云、書林大に當惑して、實にも先年足下へ申約せし事唯今存出せり、其書は其後望人有て賣遣しぬ、其時足下に約せし事を忘却し、不告多罪、今さら奈何ともする事不克と慙愧す、大雅案に相違して愁然として申ける、我斯迄貧敷中にて、金を拵しは、此書の爲なり、既に價調て望を不果は天なり、苟も此金を他用に遣はん樣なし、不如祇園の地に住するからは、恩謝の爲に御社に獻せんにはと、右の金不殘束ねて祇園へ奉納す、是を世に傳へて大雅の廉潔を賞し、倍此人の書畫を世に翫ふ、總じて常の風俗中華の騷人に似たり。（翁草）　香雨曰く此事異傳あり、左にかゝぐ。

大雅石刻の十三經を得ひとて、年比心にかけしかば、たくはふる所の錢百貫に及べりしに、書賈なほ售らず、嘆息して其の錢を祇園の社に奉納す、時に御社修造の事あればなり、其の時のさま、わらむしろの大なる袋に巴を畫き（神輿の紋なり）拾貫文づゝ拾にして、門人とともに禮服を着し、青竹の棒もてさし荷へり、社司其の名を揭げむとせしを固く辭す、されど誰となくてはあるべからずとて、玉瀾と記せりき。（畸人傳）

いづこの尊夫人ぞ

或時難波に出立つに、筆を携ふる事を忘る、妻玉瀾見つけてもちてはしる、建仁寺の前にて追ひつきて授くるに、道人おしいたゞき、いづこの人ぞ、よく拾ひ給はりしとて別れ去る、妻もまた事なくて歸れり。（畸人傳）　香雨曰く、此話は當時人口に膾炙して有名なりしことと見え、本冊口繪に示したるが如く、大雅と同輩なる畫人三熊思孝が之を繪にかいて居る、三熊思孝は介堂と號し、畫を長崎の月湖に學び、櫻花を描くを以て得意となして、又花顛子と號した、大雅よりは七歳の年少である、その人が此圖を描いたのであるから、大雅玉瀾の容貌風姿も生寫しであらう、從て事實は固より眞實であらう、又『近世畸人傳』は此思孝が發案で、伴蒿蹊が筆を執つたのである、故に同傳中の大雅の話は恐くは大雅在世中に思孝が見聞したことであらうから、概ね信ずべき事實であらうと認定せられる。

袴着て旅行

又近江高崎侯の許にて障子を畫く、京に歸りて後其の報を賜ふに、吏云ふ、禮服をつけて謝を申さるべしと、道人（大雅）諾して、やがて高崎迄袴を着ながら行きたり。（畸人傳）

月下の遊行

大雅嘗て近江の守山を過ぐるとて、宇野氏が家を敲く、主人之を聞きて、時四更に及びて烈しく門を敲くは誰れぞと、自ら起きて出で見れば大雅なり、何事あればやと問ふ、されば近江の某所にまゐりて、月夜のおもしろさに浮かれて、かく深夜に此處まで來れり、あまりの景色よければ、吾獨り眺めんも惜しければ、足下を訪ひて夜と倶に月を賞せんが爲めなりといふ、さなりやいざ給へとて、喜びて内に請し、酒を酌みて興じ明かしゝと、宇野氏の物語なり。（翁草）

謎招牌

京都御旅町の煙草屋の招牌に雲中より鬼腕を出したるものを畫く、是池大雅の筆也、煙草に鬼左三の謎なりと、亦大和大

路に赤萬能膏てふ膏藥賣家に、風藥呑んでなをらぬ風藥、是も大雅の筆也、嘗て此の賣藥店の主人は池大雅の門に遊で書を學たるとぞ、風藥良劑を工風なしたるが故に、其の看板を池翁に乞しかば、翁大醉中筆を採てのんでなをらぬ云々と書したり、主人不審はれず、翁に問呑で治せぬ風藥とは不詳ならずや、殊に招牌なり書改て賜へと切に乞ければ、翁は醉眼朦朧たるを開き、此人の事理にうとさよ、他の風藥を呑で治せざる時、此の風藥を呑めば治すといふ事也、と饒舌して打臥たりと。（繪畫叢誌）

敗紙中の玉瀾

香雨曰く、大雅の書高雅、看板に書かば至妙言ふべからざるものあらん、その看板を書きし事右の外二三の別傳あれども今略す。

客有大雅の家に宿す、甲斐絹の寢具を供せらる、襟邊垢膩に汚ると雖も、輕暖身に適す、客以爲らく大雅清貧なれども、尚此具を有すと、半夜厠に行かんとして誤て大雅の室に入て見れば、大雅は毛氈を纏うて寢り、玉瀾は敗紙の中に眠れりと。（繪畫叢誌）

馬の往くに任す

大雅翁奥州へ行けるとき、酒店の前にて馬士、一杯飲み來るうち翁は馬上に待たれよとて、酒店に入りけるが、やがて出でみれば、翁も馬も見えず、馬士驚きて所々尋ぬれども見えざれば、せんかたなく家にかへりみれば、厩にて馬の嘶く聲あり、行きて見れば、翁は馬に跨りて厩に居たり、如何にして此處へ來りたまふと云へば、我は馬の行くに任せたれば、遂に此處へ來たれりと答ふ、日暮なれば、行くことあたはず、見ぐるしけれども我家へ一夜とめ申したしと云へば、翁曰く、我なんにも謝すべきものなし、我畫を好めり、一枚かきて謝せんと云ひしが、紙なし、此障子へ何ぞかきてたまはるべしといへば、さらばとて障子へ畫がきたり、後に旅行の客其の畫を賞美せしかば、紙をはがして今に祕藏してありとぞ。（逢原記聞）

飴と小景一紙

大雅一日市に出でたるに、嵐山の櫻花方に盛なることを聞き、往きて之を觀る、歸路饑うること甚だし、然れども一錢をも携へず、偶〻路傍に飴を賣るものあるを見、乃ち姓名來由を陳べ、請ひて之を啗ひ、墨斗を抽きて小景一紙を寫し、懇に謝して去る、賣飴者家に歸へり、之を人に語るに、明日來り乞ふもの、門に相踵ぐ、乃ち賣りて利を獲たり、是に於て自ら大雅の家に至り、復た之を索む、大雅曰く、これを一たびするも甚だしとなす、豈再びすべけんや。（香亭雅談）

青氈敗紙我家珍

大雅門戸に鎖鑰なし、書畫の敗紙室中に狼藉たり、居常青氈を敷きて僅に其間に坐す、一夜盜入り、物を奪て去る、大雅偶〻睡覺め、盜を呼び返して曰く、當に攫み去るべきもの數品あらん、唯青氈と敗紙は我家の珍とする所の者なれば取去べからず、其餘は君の欲する所に從はんのみと。（近世叢語）

小僧は後世可恐人

大雅一日比叡山に遊びし時、座主に禮するに頭を下げずして小僧等に拜せり、此事を役僧の尋ねければ、大雅の曰く、座主樣は老年なれば最早あれ迄の人なり、頭を下げざれども我に於て耻づる所なし、唯小僧衆は後世恐るべきの人、若し輕蔑して後に頭を下ぐるに至らば大雅の耻なりと。（繪畫叢誌）

富士の寫

大雅東海道を江戸に下るとき、富士山を見て大に心に賞し、其夜原宿の旅店に宿せしに、富士の山影尙ほ腦裡に來往して寢ぬる能はず、幸に枕頭白屏風のあるあり、因りて家人の寐ぬるを伺ひ、墨斗を出して、之に富士山を畫く、而かれども家人に覺られんことを恐れ、早曉餐を喫せずして去る、旅亭の主人之をみて大に驚き怒れども、奈何ともする能はず、大雅江戸に至り、某侯に謁し、此事を語りしに、某侯にはわざ〳〵原宿に抵り、旅亭の主人に請ひて其屏風を見られしに

實に稀代の尤物なれば、直に讓り受けんことを談ぜられたるに、主人初めてその大雅なることを知り、詫入て讓らざりしと。（同）

柳里恭と僞る

大雅若狹國を遊歷せしに、路銀盡きて一文を餘さず、路傍の茶店に憩ひ、畫を好む家はあらざるやと問ひしに、我村吏は屏風一双を新調して、京都より柳里恭の遊歷を待居ると物語れり、大雅直に其家に至り、自ら柳里恭と僞り、三十兩にて其屏風に彩色畫を描く、村吏十五兩を渡し、餘は御禮の爲上京持參すべしと、大雅乃ち十五兩を得て歸京せり、後村吏上京して里恭を尋ねしに、人全く異れり、而して里恭我は若狹に至りしことなしといへば、益不審にたへず、尙委しくものがたりしに、そは全く大雅なると知れ、村吏は却て大に悅びしといふ。（同）

馬賃にすゝ

大雅玉瀾と天の橋立を見て、若狹へ向ふ路、馬夫馬を勸む、依て夫婦合乘にて舞鶴港竹屋町壺屋某の宅前に來り、馬より下る、馬夫賃錢を乞へども一錢の貯もなし、困却せし折柄、壺屋の主人之を見ていと氣の毒に思ひ、且つ大雅夫妻なることを聞て、其賃錢を拂ひ己が家に滯在せしめしと云ふ、此時近在千年村の津田惣右衞門といへる者、同家にありて夫婦に畫を乞ひければ、大雅は岩に蘭、玉瀾は岩に菊を畫きて與へしが、此畫幅今に津田家に存在せりき。（同）

大雅と蕭白

曾我蕭白常に大雅堂と交り厚く、或時大雅蕎麥粉を得、蕭白に約して云、近きに來らば製しまいらさんと、蕭白もと之を好む、日ならずして東山を訪ひ、相對して雅談時を移す、しかるに蕎麥のことは互にわすれたるが如く日既に晡なる時に至りければ大雅云、吾腹拐然たり、君もさこそあらめとて妻玉瀾に命じて茗粥を出し相與にこれを喫し、又ものと如く風月を談じ夜もいたくふけぬれば、大雅云、君の歸路この闇夜に提灯なくてはかなうまじ、されど吾家にも具なしとて、

圓燈に蠟燭を點して送る、蕭白直に是を提げ蹣跚として歸れり。（近世名家書畫談）

飄然芳墨に遊ぶ

大雅浪華に至る、大和屋某これを迎へて、その暖簾に書せしむ、大和の二字成るや、忽ち筆を投じて起ちて出づ、主人謂へらく、厠に入れりと、久しうして見えず、その之く所を知らず、數日を經て歸り來る、主人其故を問ふ、答て曰く、初め筆を下す時、大和の文字より忽ち芳山の櫻花正に盛なるを意うて佳期失ふべからずと、遂に芳山に遊ぶ、幸に盛開に遭ひ、其願を達するを得たり、今は當に前約を果たすべしと、再び筆を取りて屋の字を追書すといふ、此談恐らくは好事家の假托する所、然れども大雅に非らざれば以て是に當るなきなり。（香亭雅談）

高野の歩障畫

或人の云ふ、高野山清淨院回祿。堂宇盡く烏有と成る、大雅この事を知り、直に高野に到り、清淨心院の玄關にかゝり、

某は京都の畫工池野秋平と申す者にて候、此度御座敷向の唐紙張付等奉納の爲に寫してまゐらせんと云ひければ、取次のものしか〴〵の事を院主に申す、院主も固より畫工渴望のことなれば、早速喚び入れ、近付きになり、畫の次第を悉く賴み、大雅も大に歡び、然らば明日より直に取かゝるべしとて、畫きけるが、其人物恰好、首を大に足を細くして、大に異體なりければ、院主大にあきれて茫然たり、又唐紙一枚に、松樹一株に茅屋を寫し、其屋の窓の中頃に人物ありて山水に對する圖を作りけるが、是も人物の首窓一ぱいに見えければ、院主ます〳〵あきれ斷りをいはんと思量する折から浪花の賈入來り合せしか〴〵事を聞て、竊に窺ひ見るに、まぎれもなき池大雅なれば、院主に告て曰く、今世有名なる池大雅の畫金錢幾許を出すとも容易に得がたき事なりと、院主もはじめて驚き喜びて盡くふすま張付を畫かしせたり、今高野山の寶物になる。

（逸人畫史）

黄檗の襖畫

明和の比、山城國宇治郡、黄檗山萬福寺といふ寺に、もろこしより渡り來たる大鵬和尚と云ふ人、大雅を呼で方丈の障子に唐土西湖の風景を畫しむ、筆をとりてその荒增をかたどる時、和尚傍に居けるが、上の方に峯ひとつ、畫き出せるを見て打驚き、あれ怪し、あれは風來峯と見ゆれ、我彼土に生れて折ふしは、其わたりに遊びしだに、かほどに所たがへず、寫得べしとは覺えず、まして此國の人のいかにしてかくはゑがきしやと、深くめでける。（落栗物語）

大雅嘗て黄檗山の書院に西湖の圖を望まれしかば、殊に苦勞して西湖の圖ある華本あまた求集めて、大鵬和尚に折衷して畫きたり、その裏に五百羅漢をも望しに、人物は巧みならざる故山水の人形にてかきたり、水行に數百人、陸行に數百人、雲中に數百人一行にわかちたりし、殊に逸筆にして奇絶なりといへり。（著作堂雜記）香雨曰く、この襖畫今は掛幅に改裝せられてある。

大雅寺

豐前中津に自性寺といふお寺がある、世に大雅寺とも稱せられる程大雅の遺作が澤山ある、寺の傳說では一とせ大雅夫妻久しく此寺に滯留し、其時作る處のものなりとのことのよしなれども、事實はさうではない、大雅夫妻嘗て九州に遊び同寺を訪ふたことはあるが、其時には例の如く自分は大雅であるとも、畫人であるとも云はないから、一枚の畫もかゝないで去つたのである、後ちに同寺の住僧京に上り、その本山なる妙心寺に於て、談偶〻大雅のことに及んで、始めて右の人が大雅であつたといふことを知つた、それでは畫の一枚も賴むのであつたがと悔んだが今更仕方がない、そこで妙心寺の一僧から紹介を貰て、唐紙一本を購ひ持て、大雅の草堂を訪ね、斯く〳〵の次第と一部始終を

物語り、先の無禮を謝して、改めて揮毫を頼んだ、大雅は左樣でござるかと快く承諾して、卽座にその持來た唐紙一本を種々にたち切て、片端からなぐりつけてやつた、住僧は喜び之を持歸つて、寺内の襖へ張附けたといふことである、今その畫を見るに、一氣呵成の妙作もあれば、又怪奇殆ど成て居ないやうなものもある、成程そんな次第で出來たものと首肯せらるゝのである、その畫今は同寺二室の襖に四五十枚遺つて居るが、もとはまだあつたもので大分散逸した、中國方面で中津出の大雅と稱するものは卽ち此寺から出たものをいふのである、同寺は中津侯奥平家の菩提寺である關係から、いつの頃か藩侯からその散逸を差止められて以來は出ないことゝなつたといふことである。（大雅堂定亮談）

お半長右衞門道行の屏風

建凌岱が淺草に住せし時一日市中を通りしに、大家の店先にいと珍らしき屏風立けるを、イみ一日見て莞爾と笑ひ行過ぎけるを、後ろより彼の家の番頭走り來り、凌岱に申けるは、ちと御尋申上度儀御座候間、卒忽ながら鳥渡御立歸り被下度旨强て申すに付、凌岱餘儀なく立戻り候處、直に座敷へ通し、亭主罷出申候は、御尋申上度儀餘の儀には無御座、只今店前御通りの砌、彼所に立置候屏風を御覽なされ何か御心覺御座候樣伺はれ候、もし左も御座候はゞ承りたし、殊に此屏風は大雅堂に書せ候處、江戸中の學者達に讀せ候へども、誰有て讀得候人無之、依て讀人有御座べきやと存し、如斯店先へ立置申候、若し御讀能く御座候は承りたしと申候處、凌岱申すは、成程大雅堂の筆跡なり、餘り珍らしき文句と思ひ、立止り一覽致せしなり、お半長右衞門の淨瑠璃本はありやと申候へば、亭主右の本を持出候處、凌岱之を披きこゝなりと、お半長右衞門が道行の段を、金屏風へ萬葉の字假名にて書たりといへり、凌岱大に饗應に預りて歸りしとなり。（一本萩）

文事

大雅詩を能くす、遺稿の傳はるもの多くはないが、專門家の說に依れば、高逸奇古の風格、自ら尋常詩人とその調を異にして、頗る見るべきものありと云ふ、その師承なる所を知らず、釋六如に學ぶといへども、六如は大雅より年少なれば誤傳であらう、和歌は冷泉爲村卿の門に學んだ、冷泉家へ入門したのは、大雅が葛原草堂の近所なる双林寺の僧謙阿彌が紹介であるといふことだが、又大雅から冷泉家へ入門を申込んだ手紙がある、それには自分は腫物を煩つて大患であるから駕に乘つてゞも入門したい、朝に道を聞いて夕に死するも可なりといふ聖人の語もあるから、明日にも入門し度い、委細は滿地(玉瀾)から聞いてくれといふ意味のもので、秋平と署名してある、詠草にも大抵秋平とあるやうである、詠草の類は往々遺存してをるが、是亦別調の風格を示して居る、又時に俳諧も作る、蓋し天賦の多能の餘り自らに迸出したものであらう、前出知命の年の句の外に、郡山遊學の時、吉野にての句に、「くずさらす水まで花の雫かな」といふが傳つて居る。

畫像

大雅の畫像は數本ある、門人月峰が描いたのが尤も眞に逼れるものであらう、原本今尙大雅堂家に襲藏せられてある、畫上に大雅の五絕が書せられてある。

雲烟拂剡藤　青綠漬吳綾
要會無聲趣　强參王右丞

此詩乃大日本大雅堂霞樵先生所作光緒八年淸和上浣晤大雅定亮先生出此詩囑余書於上金凌王冶梅時客於山城鳧川

卽ち定亮が明治十五年に淸人王冶梅に書しめたのである、此圖は上下を着た座像で、摹本もあり、又繪畫叢誌などにも揭載せられて世によく知られてをるが爲めに、本書には別本を紹介することにした、卷頭に

掲げた半身像は、原本の筆者を詳かにせないが、岡本春暉が摹寫で、京都鳩居堂に藏せらるゝものである、次に門人餘夙夜がかいたのが、大雅の門人であつた尾州鳴海の下郷學海が家にある、是は大雅中年前の像で、羽織のやうなものを着た姿で、上に門人噲々堂が楷書で碑文をかいてをるさうである、今一本大阪の岡熊嶽がかいたのがあると聞いたが、其所在を知らず、而して『六如詩集』に左の一詩あるは、何れの像に題せしものにや、又その存否も詳かにせない。

釋六如題大雅堂圖像賛並小引

丈人以二書畫一著二名海内一、余向以二室邇一屢相往來。略知二其人一。蓋葆レ眞耦レ俗。隱二于小技一者也。頃有下人齎二其遺像一。求ㇾ題二一辭一。余私欽二高風一。不レ揣二蕪陋一。輒爲賦二長句一。字字實錄。不二敢文飾一。丈人有レ知。應レ撫二掌於無何有之鄉一矣。

鶉衣蓬髮意怡然。言語近レ禪形肖レ仙。避レ世仍懷濟レ世志。賣レ山不レ蓄買レ山錢。襪材滿レ屋纔容レ膝。川字成レ腔時弄レ絃。至竟深心誰可レ會。空敎二姓字藝中傳一。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

……又工二篆刻一、其印載在二芙蓉山房私印譜一、曾學川評二大雅一、有下池貸成神二乎印一者之語上、嘗自刻二前身相馬九方皐之句一誤作二方九皐一、每幅用レ之、遂不レ改レ刻、其胸襟洒落、不レ拘二於物一、率此類……（日本印人傳）

四　玉　瀾

玉瀾、名は町、別に松風又葛覃居と號す、父は德山氏、權十郎秀榮といふ、母は百合、百合は祇園の梶女の養女である、百合の家を松屋といつた、性粧飾を好まなけねど、姿色娟秀、和歌を善くす、常に母が茶店に侍して客に接するから、自らに京洛の富豪子弟の意を屬するもの少からずあつたが、百合はかねて、德山氏に深く契る所あつて、他を顧みなかつたといふ、德山權十郎は江戸幕下の士の次男で、當時落魄して京都に流寓して居たが、偶々百合に助けられて糊口するを得て、情交數年に亙つて、兩人の間に一女を擧げたのが卽ち町である、然るに江戸なる德山氏にては權十郎の兄なる人が先に歿し、次で父もなくなつたが爲めに權十郎が家を繼ぐことになつて、權十郎は江戸へ歸らねばならぬことになつた、出發するに當りて百合を伴はんとしたが、百合は情理を具して固く辭して從はなかつた、そこで百合はかたみのお町を一人養育し、貞節を守て又他人に見えなかつた、町は生長して大雅に嫁したが、百合の歿後一日關東一士人が訪ひ來りて、我は德山權十郎の一子某なるもの、夫人はまことに我が異母姉である、爾來相往來して以て匪他の情を敍せんことをと、なつかしやかに物語つたが、町は亡母の遺誡を守て之に應ぜなかつたといふことである、百合がことは賴山陽が百合傳に記されてある、町は大雅に嫁してからはよろづ夫の爲す所に習ひて、よく繪事を解し、柳里恭に從て筆法を學び、里恭の號玉奎の一字を貰て玉瀾と號した、又大雅と共に冷泉家へ入門して和歌も學んだ、その始めて冷泉殿へ召されし時のさまは、蒿蹊が畸人傳に記して曰く

夫とともに冷泉殿へ招かれて參り、歌を學ぶ、始めて參りし時、所からといひ、名のいつくしきに、いかなる婦人ぞと、御内の女房達、

今やく、と待ち居たるに、思ひの外糊こはき綿衣に、魚籠を提げたる樣、大原女のわらうづはかぬごとくなれば、大きに驚きけり。是亦寵辱を心とせざる夫の行に配するなるべし、道人はかゝる高名の畸人なり。かれより招き給へるなり、富みたるにもあらねば、夫婦ながら假初の禮義を表しても有るべきを、世人にまさりて季節の射物をとゝのへ參れり。歌はかの氣象に應ずるやうに添削すとのたまへりとぞ、又殿より興じて、あかき蔽膝を婦に給りしかば、春は母が名殘の茶店に出でたる事もありしとなり

ある年の春のあした、若菜に梅を折りそへ携へて參殿した時に、爲村卿歌を給ふ。

つむ若菜折りそふ梅の色も香も春の心の花かたみかも

又ある日參殿した時に、遊可といふ名を賜ひて、其の上白き手巾と赤き前垂を賜つた、それから年の始のお祝儀には手巾前垂を腰に絡うて參ることにしたといふことである。

玉瀾がよく夫の行に配したことは、前出數條の逸事に依て以てその一班を知るべしである、畸人傳には「夫は三絃の與みといふものをさびたる聲して彈きうたへば、妻はまた古びたるうたをつくし箏にかけて彈く、其の箏の與みもまたよくせりとなむ、世づかぬ我のうちのさまなりき」と記し、山陽の百合傳にも「夫妻終日紙を伸べ墨を舐り、琴酒を以て相娛む、釜甑塵を生ずれども晏如たり」と敍して、「人之を伯鸞の孟光に比す」と結んで居る、かくて玉瀾は大雅に後ること八年にして、天明四年九月二十八日といふに病歿した、享年五十八、(享年に就ては異論があるが、今姑く紫雲石の過去帳に從ふ、大雅堂定亮からは六十二と聞いた)法諡して寶譽玉瀾信女といふ、松屋の菩提所なる東山黒谷の西雲院卽ち

紫雲石に母百合と共に永眠の夢を結んで、夫大雅の側には葬られなかつた、生きて琴瑟相和し、死して偕老同穴の契を全うせず、芳魂永へに迷離す、そも〳〵又いかなるわけのあつたものであるか、傳說は這般の消息に就て何等告ぐる處がない。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

娘のもとへ眞葛の花をおくりて　百合

眞葛葉のいろしあせずば養ひし親の守りの花のひとふさ

玉澗遊可

櫻花色うつろはでいにしへの春のまゝなる香に匂ふらし

五　大雅歿後の大雅堂

大雅玉澗の間には一人の子がなかつた、そこで大雅の晩年には、自分が百年の後に及んで玉澗が困らぬやうにと豫て用意をしておいたものらしい、依賴の揮毫が忙しい間にも、時には獨り興に觸れて、何くれとなくかいて玉澗に遺した書畫が、無慮數百枚あつた、玉澗は大雅歿後それが爲めに不自由なく暮したのであるが、玉澗が死んだ時にも、その書畫がまだ〳〵澤山に殘て居た、そこで夙夜、月峰等の門人が相談して、其の殘物の書畫を賣て、其金で、先師大雅を紀念すべく大雅堂を建立することに一決した、故に大雅堂を建てたのは、凡そ天明四五年の頃のことであらう、其の建立するに當て恰も古へ靈山に天哉翁長嘯子が營んだ歌仙堂の名殘なる古い柱礎などが傳つてあつたから、それを幸ひと同山の坊へ請うて貰ひ受け、それを基とし之に增築を加へて一堂を建てた、「樓の

上に六疊、下に六疊の筵を敷て歌仙堂の舊蹟をとゞむ」と、其頃の記錄にあるから、上下六疊敷の部分が歌仙堂を持て來たものらしい、さればそれにつゞいて居た平家造の八疊、五疊、二疊二間の合計四間が新築であつたらう、軒の瓦には大雅堂といふ篆印を陽刻にしてつけた、之を大雅堂と稱したのであるが、建立の頃にはもとのまゝに歌仙堂ともいつたらしい、位置は今の圓山公園の一隅に大雅堂遺蹟とか刻んだ石碑の建てられてある處であるが、昔は双林寺の境内で、門前の北とかいてある。

大雅堂建立の頃には、大雅遺愛の書畫什器の類も皆此堂に保存せられてあつた、就中高さ五寸五分許りなる一軀の觀音銅佛は、故人の念持佛にして由緒ある佛體なれば、大雅堂の本尊のやうにして安置せられてあつた、其の由來を餘夙夜がかいたものがある、曰く

先師大雅翁、年頃觀世音を信じ給ひけるに、或夜夢中に此大士を見奉る事三夜に及ぶ、怪みあたり近き所を徘徊し給ひけるに、ある時其邊りに此銅像有り、果してかの夢に見奉る所の尊像なりければ、かぎりなく悅び求め得て、家に歸り座上に安置し、信心ます〳〵怠る事なし、夫より例年七月十七日の早天清水寺に至り、此尊像を彼瀧に清め奉りて、社友もまねき會せられしに、やつがれも年毎に交りて、いともに信じたてまつりて、又扉にみつから五岳眞形をかきて、尊像をひめ奉りし也、此額則その戸びらなり、後の人にも其ゆへを知らしめんと、爰にあらましをかいつけ侍るのみ。

寛政十二年正月　　弟子　餘夙夜記（花押）

右の如き次第で、毎年七月十七日には早天觀音像を清水寺の瀧で清めて歸てから社中同人を會するを例とした、之を觀音會と稱した、此の灌佛の古儀は後累世大雅堂の年中行事となつて、今尙行はるゝとのことであ

る、又大雅が平常澤山にかいた般若心經竝に遺墨の埋め、遺墨に「和光同塵」と篆體でかいてあつたのを石に勒して、その上に建てた、その傍に蕉中大典禪師の記文が刻んである、其文に曰く

大雅池生之於レ書、自爲二一家一、蓋其人才膽思逸、才膽則騁二輕俊於運腕之間一、思逸則寓二高暢於揮毫之端一、世之能レ畫者、率不レ能レ書、此所下以與二華畫一相逕庭上、而生則兼レ之矣、亦出二於其氣象自然一己、生嘗多寫二般若心經一、遊二生之門一者、沐二浴風流一、生歿而不レ能レ忘、乃相謀取二其心經及遺墨之帋一、藏二諸白山菊溪之側一、立レ石焉、勒以二和光同塵四篆一、亦生所二曾書一云、余既悅二生之才思一、又喜二門人之志有レ翕也、爲敍二其故一、使レ彫二于傍一、

安永丁酉之秋　　蕉中道人識

安永丁酉は六年なれば、大雅の歿した翌年である、故に此碑は右の大雅堂建立よりも遙か以前に出來、白山菊溪の側とあるから、卽ち双林寺中長喜庵の庭中に建てられたものである。それを大雅堂が出來てから後に堂の庭へ移したものらしい、又此の碑の側下に、梶と百合との歌を彫んだ高さ二尺餘りの小塔が二基並べてあつた、刻んだ和歌は

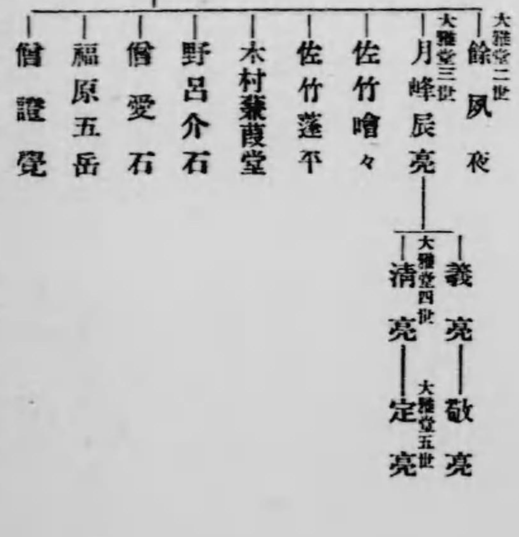
和光同塵碑（江湖快心會所藏）

雪ならば梢にとめてあすや見ん夜の霰の音ばかりして　梶

清くすむ心の月の隈もなく春秋しらぬ花の臺に　百合

とある、前者は『梶の葉』中の名歌、後者は百合が辭世であるらしい、是は申すまでもなく玉瀾が祖母と母とが祇園風流の名殘を留むべく建てたのである。

さて大雅堂が出來て、最初には餘夙夜が表向は留守居といふ名義で此に住んだ、夙夜歿後月峰がその跡を繼いで、大雅堂三世と稱し、その次子清亮が四世で、五世定亮に至る迄、相繼承して此堂を守り、東山名勝の一となつて居たのであるが、偶明治三十八年京都市に於て圓山公園を設くるに當て、堂の保存のことに就て、市參事會と定亮との意見が衝突したが爲めに、定亮は遂に堂屋を解いて、此の由緒ある地を引拂ひ、自分は高臺寺前の月眞院に假寓して、大雅堂再建のことは絶えず念頭にはあつたらしいが、その計劃も果さずして定亮逝き、どこかに積込んであつた大雅堂の木材もいつの間にか朽腐して、全くあとかたちもないことと



となつた、唯獨り和光同塵の石碑が双林寺の狹い庭前に厄介物のやうになつて押込められて、僅にあはれな名殘を留めて居る。

大雅の弟子門流は隨分あつたやうであるが、今其の名の傳はるものを擧げてをく

大雅歿後の大雅堂

—僧　觀了
—岩溪嵩臺
—嘯風亭雄選
—安岡專伯
—下鄉學海
—田　正路

＊　＊　＊　＊　＊

池居士家、安二觀音大士像一、毎歳七月十七日、與二同社二三輩一、奉以往二音羽一、瀑泉爲二灌浴一、歸而設レ齋供養云、

蕉中大典

人間幾處苦二秋陽一、獨有二懸泉似レ雪涼一、濺沫纔分紫金影、清冷乍逝玉毫光、自レ知二離垢超二三界一、可レ信同塵應二十方一、歸到伊蒲成二保社一、風流肯讓白蓮房、

六　大雅概論

藝術は人格の反映である、再現であるといふ、成程一面にはそんなものかも知れない、さうすればその人の人物が分ればその藝術も分るわけである、先づ大體に於てそれにも相違あるまい、然るに多くの場合に於てはその作家の生涯とか性格とかゞ十分に分らないから、單にその作品を見ただけで評論をやる、又その作品からして歸納的にその作家の人物を推考する位のことである、作品だけの評論をやるにはそれでもよいかも知れぬが、徹底はしない、況んや一人の藝術家を描き、その藝術を論議しやうとならば、兩方面の可成豐富なる資料を有せねばならぬことが、第一の必須要件である、處が大雅は日本の畫人中では比較的その資料が多い、尤も彼の行狀を年代的に明確に記した材料は、他の畫人と同じく乏しいが、抽象的に彼の人物の一班を想見すべき逸話的の資料は隨分あ

る、又作品も可なりに遺存して居る、故に之を論議するには都合のよい人物である、尤もいづれも比較的の話である、次には其の評論をやる人物である、元來日本には畫論といふものがないといつてもよろしい、畫畫の議論をやるのはつい近世のことで、その多くは南宗家か漢學者の支那畫論の受賣的のもので、小六かしき文字を並べて、傳習的な千篇一律的の文句を述べたものである、之も我邦に適當なる評論用の國語が缺けて居るから、餘儀ないことであるが、其の評論者が多くは藝術家であるから、其議論が自らに主觀的で感情的で、而も支那流の誇大的なる風を脱せないのは遺憾である、是迄大雅が受けた評論も凡そ其の類の論調である、大雅を評論するものには大に之を讃美するものと、之を貶するものとの兩方面がある、前者には大雅を神樣の如くに崇拜した木村蒹葭堂を始めとして、最近小杉未醒君の如きに至る迄、その多くは南宗畑の人であるから、是迄大雅を評論したものの九部九厘迄は此の崇拜組である、之に反して大雅の怪醜を以て高雅となすは其の盛名に雷同したる耳食の徒である、其の藝術上の價値は決してそんなものでないと論ずるものもある、いづれも夫々その立場を異にして、自己の素養と趣好とに從てした評論であるから、之を第三者より觀れば、いづれも皆偏頗の傾向あるを免れない、由來藝術上の批評は銘々勝手の熱である、絶對不動の權威を有するものにあらねば、古今人の大雅評も之を重視するの必要もなければ、又茲に之を陳列するの餘白も乏しい、依て今其繁雜を避けて極めて主要なる評言數則を摘出し、以て大雅を大觀して本篇の結了を急がんと欲す。

大雅の人と爲りは、前出幾多の逸話に依て想像し得べきが、逸話もあまりに多いが爲めに矛盾もあれば信ずべからざることも少くない、そこが

大雅の大雅たる所以で、その概觀は大典禪師の碑銘に於て能く盡されてある、斯くの如き性情は固より天賦に出たものには相違ないが、一面には環境の感化と修養とに依て得たる結果でもある、之を詳說すれば頗る複雜なるものであらうが、その主要なるものを擧ぐれば、禪道と老莊學の修養である、大雅が白隱禪師の室に入て參禪し、直に偈を呈したるが如きは、當時既に修道の尋常ならざるものがあつたと見なければならぬ、一莖の蘭、一葉の竹皆禪機の發露に成れるものとも解せざるを得ない、「桑嗣粲壯年の時、大雅堂に面會せし話次に、凡そ畫事は如何なる所爲し難きにやと試みに問ひたるに、大雅答て曰く、唯紙上に一物もなき所こそ爲し難しとなり、玆に於て嗣粲茫然として、此意を悟る事なかりき」とは、嗣粲が自らその著『繪事鄙言』に於て述ぶる處である、是卽ち宛然たる大雅禪師の問答である、又老莊の學に於て會得する處あるが如きは、是迄何等の書物にも見ないことではあるが、大雅が老子經に親炙したことは想像するに難からぬことである、何時の頃にか、彼は其名を無名と字を貸成と改めたのは、老子四十一章の「道隱無名夫唯道善貸且成」の句に採つたのであらう、又彼曾て老子の語なる和光同塵の四字を篆書しておいたのが、後年彼を記念すべく不滅の石に刻して今尙嚴存してあるのは、偶然の結果ではないかも知れない、故に大雅の哲學は禪に發して老子に歸したとも言ひ得べきかとも思はれる、然れどもその禪道に參し老子を奉じたとはいへ、之に沒頭し耽溺して融通の利かなくなる樣なことはない、故に佛にもならねば、仙にも化せない、常に之を不離不卽の間に攝取し默契して、其の要領を得て居る故に、彼が深遠幽妙なる禪や老子の奧旨を悟入したのも格別研究の結果にはあらずして、直覺的に感得したのであらう、そこで彼の性格も藝術も其の大半の根柢はそこに歸

着すと觀せんと欲するものである。

大雅の書は十四歳のものも晩年の作も殆ど辨ずべからずとは、曾て定亮が語つたことである、畫は田能村竹田が、『山中人饒舌』に、月峰の言を錄して曰く

池翁畫數變、然大抵有三三種一、其一布置穩雅、步二趨古人一、署曰三三岳道者一、爲二四十歳前後筆一也、其一逸筆飛墨、如下名士事了始歸二林下一、葛巾野服、行散自由上、至二蘭竹窠石一、款題直用二畫筆一、字與二花葉一相聯綴、署曰二霞樵一、俱爲二晩年筆一也。

年代の標準は大體右の如しである、大雅の揮毫するや隨分無造作に無頓着になぐりつけたことは、其の遺作から見ても、又諸家の記したものから見ても想見せらるゝことである、皆川淇園が飲中八僊畫卷の序文中に

至下或有中童子塗鴉醉漢潑墨者上、而他人所二毀譽一則恬不レ介レ意

と記し、又柴栗山が

池大雅畫奇絶、人皆知レ之矣、其作レ字、常好二怪僻支離一以自珍、殆不レ可二端倪一也、(中略)就中草聖尤妙、飄逸縱横、毫不レ失二規矩一矣、其造詣之處、恐一代無二與偶一焉。

池生書畫晩年故意作レ怪、以欺レ人、人眩二其怪一不レ能レ辨二眞贋一也、

と書する處を見ても、醉筆縱横、墨湧き筆躍るの狀が想はれる、そこで大雅反對側の人は、之を目して奇僻といひ醜怪といひ、そんなものに何等美術的價値はない、世人の多くは其の醜怪なるを知りながらも、俗眼不解の徒と嗤笑せらるゝのを恐れて、却つて解つた振をして、その賞讃に雷同するものである、要するに世間は大雅を買カブつて過褒するのである、耳食の徒であると、ケナす、此等の非難派の人は凡そ西洋の美學的の立脚地からいふ人で、精巧なものでなければ美術でないといふ風の人で、

東洋の墨畫の氣韻といふものゝ研究が足りないからの議論であると、南宗畫家からは反駁する、此の論點が大雅の畫を論ずるに於て、極めて重要なる決勝點である、何となれば若し此問題が否決せらるゝに於ては大雅の畫の大半はゼロになる結果を來すわけになるからである、而して此の醜怪の辯をなしたものは、賴山陽を以て第一となす、墨竹の題辭中に曰く

山人書畫可レ謂二醜怪一矣、而醜中含レ研、怪中藏レ正、世之贋手能二其醜與怪一、而不レ能レ爲二其研與正一、試以レ此一觀

流石に山陽は甘く辯じたりと云ふべしである、竹田が「大雅は正にして譎ならず」といふのも同意である、その研といひ、正といふものゝ意義も正確には解らないが、どうせ零コンマ三三といふ調子で、お醫者が分析や解剖をやるやうなわけに參らない以上は、說明し能はざるものである

が、要するに構圖は蕪雜散漫で一見醜怪に見ゆるものであるが、之を能く玩味して見ると、用筆用墨卽ち描線と墨氣の至妙なるものにして、そこに超言說卽ち言語同斷の神韵が縹渺として溢れ、幽玄の極致に達したるものあるをいふのであらう、彼の墨竹の一葉を見ても、少しく繪畫趣味あるものは直に感ずるものである、本冊卷頭口繪の「五老峰」の如き、運筆の大膽にして頗る愉快なるもの、我邦古今の畫人中何人かよく之に比儔すべき、之を天稟の靈腕と稱すべきか、大雅の偉大なる所以蓋し玆に存するものである、又古人の評論中金井烏洲が『無聲詩話』に

大雅、襟胸難レ測、其畫往々粗率、位置點染、下レ費二心匠一、萬象錯綜、縱筆揮灑、不レ規二規於摹擬一、不レ拘二々於眞景一、天機活潑、雲行水流、自レ非下胸中有二丘壑一、汪洋如上二萬頃波一焉得レ若レ是、王穀祥畫論所レ謂、得レ意忘レ象者是也。

といつたのは、比較的能く肯綮に中れるものであらう、又俗人の見て以て醜怪となすのは、大雅から申せば彼が信條たる和光同塵の體現であるかとも思はれる。

大雅の畫伊孚九にヒントを得て、その慕ふ所は元朝の四大家、殊に倪雲林であつたらしいが、彼は何に依て倪法を學んだか、又倪氏の眞蹟を見たことがあるかどうかも疑問である、今日迄も支那から舶載して來た畫中に、倪雲林の畫なるもの殆どない位であれば、大雅の學んだは恐らくば版行の畫譜の類であらう、從て倪法の眞髓を得なかつたが爲めか、彼の遺作を檢すれば、その風らしいものは殆どない、又米家の古法に似た處もない、寧ろ明末清初の諸家に負ふ處があるらしいが、さればとて之を蕪村が忠實に明末諸家を學べるに比すれば、遙かに超脱したものであるから、之を略言すれば、倪雲林の氣分を明清の手法で行つて自らに一家を成したものと稱すべきものではあるまいか。

大雅と蕪村との對照は恰も明治の劇壇に於ける團十郎と菊五郎との如し、その巧緻餘りありて精彩陸離たるものは、蕪村と菊五郎の壇場にしてそのいかにもアーチスチックなる技風は、所詮大雅團十郎の及ばざるものであるが、氣宇の活達、鴻量にして形似の末を顧みず、各其當時の藝壇に革新を高唱して一世を風靡したる偉大に於ては、蕪と菊との企及すべからざるところ、要するに大雅は蕪村よりは一枚上の役者である。

叙し來て見れば、盡さゞる處頗る多くして紙幅盡く、會主の原稿催促亦頻りに急にして、遺作の研究に精なる能はざるは頗る遺憾なるやうではあるが、顧れば斯んな小冊子にては所詮盡し得べきものではない、又古來論議の隨分やかましかつた後へ出かけて、彼此と申すのも畢竟お茶濁したるに過ぎない、下手な談議は寧ろ避くるを上策となす、地下の大

雅翁も定めて呵々大笑して「それでよし〳〵」と申さるゝなるべし、若夫大雅が土佐狩野の舊空氣に滿ちたる時代に於て、南宗の清新なる格調を絶叫して、我が近世畫壇に別天地を開拓した事、卽ち大雅が歴史的に最も意義あることに至ては、既に前冊『南宗畫』に盡されてあるから、あれでよろしいとして急いで筆を擱くことゝした。

＊　＊　＊　＊

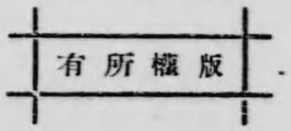
▲附言　本書校正中、偶〻高芙蓉が遺書を閲して、かの大雅が幼時黄檗へ往つて杲堂和尙を驚かしたのは、七歳の十月のことであることを知つた、又幼名又次郎といつた事を追記しておく

池大雅　終

大正五年八月二日印刷
大正五年八月六日發行

（定價金四拾五錢）「送料四錢」

美術叢書第四編
（池大雅）



著作者　相見繁一
發行者　東京市神田區五軒町一番地　小林壽一
印刷者　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　倉谷鎭夫
發行所　東京市神田區五軒町一番地　美術叢書刊行會　振替東京二三一六七番

賣捌所
東京神田區表神保町　東京堂　京都市上京區寺町通　芸艸堂
東京京橋區元數寄屋町　北隆館　大阪市東區平野町　柳屋書店
東京京橋區銀座三丁目　東海堂　大阪市東區淡路町　登美屋

東洋印刷株式會社印刷

文部大臣高田早苗先生序文

新刊 觀山畫集

上製金五圓五十錢
並製金三圓
送料内地金三十錢

下村觀山畫伯の畫集は本書を以て嚆矢とす、集むる處のものはすべて傑作のみ、畫伯が最も得意となす、老子、哲祖あり、出山釋迦虎溪三笑あり、富麗にして高雅なる、靜清圖及び城外の雨あり、宏壯細密にして然も大膽なる富岳の圖に至りては、其偉大躍如として卷帙の間に溢れんとす、其他畫伯の妙技は之を本集に收めて餘す所なし。

書冊大さ＝四六四倍　堅一尺三寸横九寸の大冊
上製＝用紙特製の厚質最良和紙絹表紙大和綴帙入
並製＝用紙上質西洋紙　紙表紙大和綴　美麗製本

日本美術院再興記念 美術展覽會出品圖錄

定價金貳圓五拾錢　送料内地金拾七錢

日本美術院第二回 美術展覽會出品圖錄

定價金參圓　送料内地金貳拾壹錢

尨大なる文展の集合團を白眼に看過して、新に日本美術院の赤旗を飜へし、旌旗堂々、布陳正々、丹青の沙場に打て出たる、新進作家より成れる勃々たる元氣は、本圖錄の外複見るべからず、本書は特に日本美術院の命により弊社之を發行せり。

タゴール翁將來
日本美術院編纂

最新刊

ビヂトラ美術學校印度畫集

定價 金壹圓參拾錢（送料金拾貳錢）

卷頭タゴール翁の藝術論

印度詩聖タゴール翁が將來したる、印度畫は、我國に於ては始めての展觀にして、少からず我美術界の奇賞を博したるが現品はタ翁既に携え去て再び之を見るに由なし、日本美術院は大に之を惜み、特に弊社に命じて此畫集を發行せらる、邦人の耳に馴れたる印度畫は、アジャンタの壁畫のみにして、印度現代の繪畫は複製品の渡來少なく、本書は唯一の印度畫集にして他に一の類書あるなし。

◎挿畫五十餘點鮮明なる玻璃版印刷　用紙最上和紙

◎書册大さ菊判　裝釘純日本式表紙印度模樣木版刷

大正博覽會 美術館出品圖錄

定價 金貳圓五拾錢 送料 貳拾壹錢

現代大家新作畫集

定價 金貳圓五拾錢 送料 貳拾壹錢

日本美術院 同人作品集

定價金貳拾錢 送料 貳錢

第一輯ヨリ第五輯迄既刊

今上天皇陛下御眞蹟

定價金 壹圓 送料 八錢

近刊 大觀畫集

十月發行

■豫告

美術叢書九月發行

第五編 浮世繪の版畫

橋口五葉先生著

發行所 東京市神田區五軒町一番地
精華社
振替東京二三一六七番

364
98

落